

KANAGAWA CASE BOOK

子ども・若者の居場所づくり事例集

2017

01 | くすのき広場
相模原市緑区 市堂上九沢団地内

02 | ほんそん子ども食堂 いただきます
茅ヶ崎市本村

03 | プレイパーク 遊 being♡あしがら
神奈川県 県西地区

04 | フリースペース えん・川崎市子ども夢パーク
川崎市高津区

05 | ぴっかりカフェ
横浜市青葉区 県立田奈高等学校内

06 | フェアスタート・フェアスタートサポート
横浜市中区

07 | はまっこ・てらす
小田原市酒匂

08 | 地域家族 しんちゃんハウス
大和市南林間

09 | MOP HOME
藤沢市高倉

10 | さくら茶屋にししば 朝塾
横浜市金沢区

11 | さくらノート
川崎市高津区



目次

- | | | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|
| <p>01 大人同士の温かなスクラムが
子どもを変える！地域を変える！
くすのき広場
相模原市緑区 市営上九沢団地内</p> | <p>..... p6</p> | <p>06 若者たちのチカラがしっかり活きる社会へ！
今、社会が考えなければならないこと
フェアスタート・フェアスタートサポート
横浜市中区</p> | <p>..... p26</p> |
| <p>02 みんなで食べる！
仲間ができる！元気になる！
ほんそん子ども食堂 いただきます
茅ヶ崎市本村</p> | <p>..... p10</p> | <p>07 みんなで食べて、みんなで作つ
はまっこ・てらす
小田原市酒匂</p> | <p>..... p30</p> |
| <p>03 プレイパークの可能性は無限大！
仲間とともに遊びを通して育つ子ども・若者・大人
プレイパーク 遊 being♡あしがら
神奈川県 県西地区</p> | <p>..... p14</p> | <p>08 子ども親も地域も育つ子育て支援を
地域家族 しんちゃんハウス
大和市南林間</p> | <p>..... p31</p> |
| <p>04 来るだけでOK
究極、生きているだけでOK
フリースペース えん・川崎市子ども夢パーク
川崎市高津区</p> | <p>..... p18</p> | <p>09 成長に愛を 大学生による寺子屋
MOP HOME
藤沢市高倉</p> | <p>..... p32</p> |
| <p>05 カフェ？が学校の中にあるわけ
ぴっかりカフェ
横浜市青葉区 県立田奈高等学校内</p> | <p>..... p22</p> | <p>10 家族にかわって「いってらっしゃい」
さくら茶屋にししば 朝塾
横浜市金沢区</p> | <p>..... p33</p> |
| | | <p>11 がんばっている大人がいることを子どもたちに
さくらノート
川崎市高津区</p> | <p>..... p34</p> |

発行に寄せて



子どもや若者にとっての「居場所」とは、どのような場所なのだろう

子ども・若者たちが地域の中で安心して、自由に集まれる場所
どんな子どもでも、若者でも、一人でだって行くことができる場所
そこに行けば、子どもや若者だけではなく様々な人と出会うことができる場所
そこに行けば、多様な生き方を知り、体験できる場所

また、そこには、出会いの場をコーディネートして
交流の輪を広げてくれる人が必要なのかもしれない

子どもや若者は、地域の「居場所」を拠りどころに
人と人とのつながりを得て、
地域に愛着と近隣の人々への信頼を持ち
将来への夢や希望を見る

平成 29 年 3 月発行の「子ども・若者の居場所づくりガイド」に続き
この度、「子ども・若者の居場所づくり事例集」を発行します

今、子どもや若者にとっての「居場所」がどのようにあるのか
どんな思いをもった人や組織によって運営されているのか
そこに集う子どもや若者に「居場所」は、どんな出会いや経験を
与えているのか取材し、紹介します

子どもや若者にとっての「居場所」は
子ども・若者を支え、育てる場である一方
新しい地域社会を創りだしていく、
子ども・若者の積極的で主体的な場でもあるのではないのでしょうか

多くの方々と記事を共有し、
より豊かな「居場所」づくりの輪が広がることを願い
第 1 号「子ども・若者の居場所づくり事例集」をお届けします

発行にあたり

「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」

(福)神奈川県社会福祉協議会は、平成28年度より4カ年の活動推進計画に「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」を位置付けました。この事業は、(福)神奈川県社会福祉協議会、(福)神奈川県共同募金会、(特非)よこはま地域福祉研究センターの3者協働により、それぞれの持ち味を生かした事業展開を目指しています。

今回「子ども・若者の居場所づくり事例集」は、既に県内で行われている、子ども・若者の育ちや自立を支える多様な「居場所」取材し、発足の経緯や活動内容を紹介し、居場所の有用性や居場所のあり方を検討するきっかけに、また、今後、身近な地域にさらに増えていくことが期待される居場所に関わる人が現れることを願って発行します。

紹介事例について

「子ども・若者の居場所づくり事例集」で紹介する取り組みは、第1号の本号については11事例。一口に「居場所」といっても多様です。

昨今は、誰でも自由に集う「たまり場」、外遊びを中心に遊びを創造し仲間づくりをする「プレイパーク」、低価格で手づくりの食事を提供する「こども食堂」、個々の子どもに寄り添って勉強する習慣をつけたり学校の勉強を補う「学習支援」、自分を知り、自分に合った仕事に出会えるようコーディネートする「就労支援」など、漠然とした「居場所」の種別はあるものの、実際に取材してみるとそのカテゴリーを越えた活動が目指すミッションや、具体的な取り組みの特性があることが分かります。

しかしながら、本号では読む方に「居場所」の間口をできるだけ広く理解されることが重要であると判断して、上記の取り組みを県内の居場所の活動か

ら選択し、取材させていただきました。

※NPO法人は、文中では(特非)と表記しています。

※各事例は2017年6月から10月にかけて取材した時点の内容です。

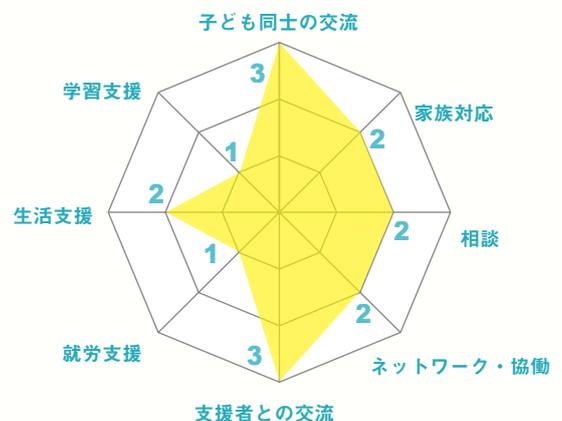
各事例に標記している指標について

指標①：活動の自己評価

取材をする中で見えてきたのは、各居場所を運営する団体では、子ども・若者、また、その家族に対して行っている主な取り組みの他にも、見えてきた課題に応じて活動の内容を広げている場合が多いことです。そのため、文中で紹介するだけでなく、「居場所の取り組み指標」を考え、8つの項目を立て、それぞれ実施度を0～3までの4段階にして、活動団体に自己評価していただきました。居場所とは、そこにいる人々の間で、「暮らしを共有」する場でもあり、関わりの中で支援の必要性が生まれ、それを実行するために外部とのネットワークが広がっていることが分かります。

指標やその項目については、本事例集を編集する

活動の自己評価



段階で考えたものです。より明確に居場所の実態を表す指標が考えられる場合、必要に応じて変更したいと思います。

指標②：活動のプロセス

今日の社会で、子ども・若者の育ちや自立を阻む課題がさまざまある中で、居場所を開設した個人や組織は、一様に、その多様な課題に現状把握という形で向き合い、地域における対策の実際などの情報を収集し、具体的な活動を生みだし、実行する中で、独自性のある活動をさらに生みだし、成果を出そうとしています。そして、最終的には、地域社会の課題を改善させたり軽減させることまでをも行っています。

本指標については、取材者がヒアリングをし、行われていることを表に書き出す方法を取りました。現状認識やプロセス上の効果把握等、団体の視点や活動展開の違いに注目してほしいと思います。

リーダーにフォーカスしたインタビューによる記事

本事例集は、いずれの事例もリーダーに取材申し込みをして聞き取りを行った上での記事です。

「居場所」を運営する団体のリーダーが、どのように今日の社会や地域を、また、子どもや若者を見ているのか。また、どのような取り組みを選択し、どのようなチームを形成して取り組みを行っているのか、できるだけ具体的に表すことを試みました。

種別について

取材をしていく中で、複数の要素をもった「居場所」があることが分かりました。明確に分類することは難しいのですが、各活動を分かりやすく伝えるため、下記の7つに分類しアイコンとして表示しています。



たまり場

学習
支援

居場所

大人同士の温かなスクラムが 子どもを変える！地域を変える！

くすのき広場

相模原市緑区 市営上九沢団地内

01

key person



吉澤 肇さん (71 歳)

市営団地管理組合 会長 吉澤さんの葛藤

子どもの迷惑行為にも耐えるしかないのか

6年前、2011年の春、上九沢団地に引っ越してきて、団地の子どもの「荒れ」に気付きました。

夜中にたむろして騒いでおり、夜中の11時に警察官にパトロールしてもらおうが、騒ぎはなくなる。団地の構造上、住民にとって死角になるような場所を見つけては、そこを定位置にたむろして騒ぐ。

このまま見て見ぬふりはできないと感じたのは、ゴミを捨てたり、花壇を荒らしたり、迷惑行為をしている子どもを見て、高齢の住民が「オイ! コラ!」と思わず注意したら、子どもが「なんだクソジジー」と言い返すのを見たとき。さらに、注意した高齢者宅のインターホンを鳴らしまくるなど迷惑行為をする子どもも。弱者の住むまちには、悪いことをとがめる力も弱くなると感じたとき、現状の深刻さを感じ、対策が必要だと強く感じました。

子どもの声を聴きたい・子どもを知りたい

自分の息子たちの子育ては妻任せでした。でも、今日の子どもや子育ては、当時とはずいぶん違うように思います。子どもが変わったのか、地域社会が変わったのか、よく分かりませんでした。ただ、迷惑行為を繰り返す子どもを団地から排除しても問題は解決しないと思いました。

なぜ、そういう行為に及ぶのか、思春期だからなのか、小学生にはその芽はないのか…。次第に、子どもの声を聴いてみたくなりました。かつて、小中学生は放課後も週末も地域にいました。今は部活や塾で地域に子どもがいません。今、地域にいる子どもは居場所を失った子どもなのかもしれない。子どもの声を聴き子どもを知りたい。くすのき広場をつくらうとする発想の一步は、こんな気持ちだったと思います。

「いざとなると、どうしたらいい？」子どもへの声掛け

子どもを知りたいといっても、私は子どもに声を掛ける術さえ知りませんでした。何気ない声掛けが、どうしたら良いか分からないのです。声を掛けられるようになったのは、安全パトロールに所属して横断歩道で朝、旗を振るようになってから。子どもたちに「旗振りのオジサン」と呼ばれるように。

登校班の子どもたちと関わるだけでも子どもの暮らしが見えてきます。「朝ごはんを食べていない子」「親が夜の仕事をされていて、送り出してもらえない子」。家庭が子どもにとって安心の居場所になっていない。希薄なコミュニケーションの中で生活している。

ふと気付いた。自分を知らない人からの「オイ! コラ!」では子どもは変わらないことを。



地域の概況



〈相模原市〉 神奈川県内では、横浜市、川崎市に次いで第3位、70万の人口規模を有する。2009年に緑区・中央区・南区の3区制の政令市となった。

〈大沢地区〉 JR橋本駅からバスで15分。周辺は相模川や相模原北公園、西南方向には大山山系を臨む自然環境に恵まれた地域。

〈上九沢団地〉 「くすのき広場」のある市営団地。

平成14年に竣工された総戸数546戸、14階建ての大規模集合住宅。そのうち、75戸が人感センサー等が設置されたシルバー住宅。既に高齢者世帯は100世帯を超える。15歳までの子どもがいる220世帯のうち半数がひとり親世帯。居住者層には、障害者、外国人も増えている。

PROFILE

美術品を扱う仕事に従事。8年前に妻がくも膜下出血で倒れ、リハビリが必要となったため、仕事を辞めてサポートすることに。6年前に市営上九沢団地に移り住む。既に2人の息子は独立。夫婦の終の棲家として選んだ団地で直面したのは、同じ団地に住む子どもたちの暮らしの荒廃ぶり。団地管理組合の委員になったことをきっかけに、安全パトロールに加わったり、民生委員児童委員も務め、「子どもの居場所くすのき広場」の提案をする。現在、妻もくすのき広場『おにぎり隊』のメンバーとして元気に活動中。

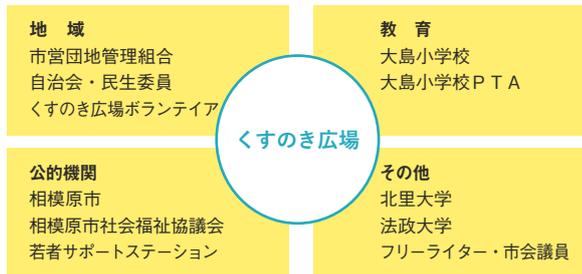
協力者を求めて、民生委員児童委員の神田さんに相談

自分のなかで、やるべきこと、やりたいことが明確になってきました。もちろん、一歩踏み出せば、役割も責任も重いし、どれほどの時間を割くことになるかも想像できず「荒野にひとり」飛び出すような思いだったかもしれません(笑)。でも、踏み出した。その一歩は、民生委員児童委員の神田さんへの相談だったと思います。彼女は理解してくれ、共感してくれ、今の仲間を1人、2人と集めてくれました。それは、スゴイ力だった。2014年1月上旬、いよいよ、くすのき広場発足への具体的な動きとなったのです。

子どもの居場所づくりに集まった人たち

くすのき広場の特徴は、なんとといってもネットワークの広さ・厚さだと思います。2014年2月、神田さんと私の声掛けで集まったのは、近隣の民生委員児童委員、社会福祉協議会、若者サポートステーション所長、フリーランスライター、北里大学の先生、相模原市の民間団体、市議員など。居場所づくりの合意形成ができて、すぐに立ち上げ準備が始まりました。

検討会の中で、近隣、自治会や小学校、PTAなどの協力も得る必要があるのではとの意見が出て、自治会、大島小学校、大島小学校PTAなどに協力要請するほか、くすのき広場のチラシも配布。さらに法政大学の学生もくすのき広場の運営に協力してくれることになりました。



集中して取り組める時間を大人が見守る



神田 実穂さん 民生委員児童委員

吉澤さんより「団地周辺の青少年が夜遊びをして、近隣に迷惑をかけている。夜警団を結成して注意・見回りをしているが根本的な解決にならない」「地域の大人が見守り、子どもたちが集まれる居場所をつくれませんか」と相談されました。共感したのは、迷惑を掛ける子どもを排除するのではなく、受け入れようとするところ。そして、大人同士がつながり、理解し合い、コミュニケーションをとる。その中に、子どもを迎えて、さまざまな経験を通して社会的規範も伝え、健全育成をしようとする考えです。吉澤さんの提案を実現するために、地域や住民のことを思い活動することや、人や組織に声を掛け、ネットワークをつくることに協力しました。

矢澤 正明さん 相模原市南区 副区長

吉澤さんが、子どもたちの居場所をつくりたいと考えた頃、私は大沢地区まちづくりセンターに勤務していました。神田さんは、まちづくりセンターにいろいろな提案を持ち掛けてくる人(笑)で、以前から知り合いでしたが、今回は、吉澤さんの提案を実現するための協力を頼まれました。直感的に「この話は良い」と感じました。神田さんは、まちづくりや福祉ネットワークをデザインできる人。そして、吉澤さんは、団地住民や子どもたちの生活課題を具体的に把握されていました。役所の協力は公益性が高いものであることが必要ですが、これなら大丈夫と思いました。実際、ネットワークに入ると、吉澤さん他、所属する人たちには、行政や福祉専門職顔負けの企画力があり、さらに育つネットワークであることを確信しました。



団体の概要



子ども居場所づくり くすのき広場

所在地 市営上九沢団地内公共スペース(多目的室)
TEL 042-762-4568(代表)
WEB <https://www.facebook.com/kusunikihiroba/>
代表者 吉澤 肇
活動内容 ①大学生ボランティアとの「居場所」「学習の機会」の提供
 ②おにぎり隊の皆さん手作りのおにぎりサービス
 ③各種イベントの実施
 (おそうじ大作戦・段ボール工作・のこぎり体験・竹とんぼ・竹ぼっくり制作など)

開設年月日 2014年7月5日
活動日 月4回(毎週月曜日)
利用定員/1日 30名
登録数 70名
ボランティア 10名
利用料金 無料
資本金 なし
助成金 35万円(地域活性化事業交付金 他)



右：おにぎり隊は8名の女性たち
年齢は、ほとんど70代

左：握りたてのおにぎり目当てに
訪れる子どもも多い

大貫 君夫さん 大沢地区民生委員児童委員

神田さんに声を掛けられ入りました(笑)。吉澤さんと話して強い決心を感じました。吉澤さんは、地域のパトロールを通じて「こんな地域じゃいけない」と感じると同時に、子どもを見ていて「中高生が、こんな育ち方をしちゃいけない」「小学生が、そういう中高生を見て、染まっていくのを放置しておいてはいけない」と感じていました。それは私も同じでした。くすのき広場を運営する仲間、こんな共感から共に活動をしています。また、私たちは、地域や子どもを客観的に見ようとする姿勢を大切にしています。地域ニーズの調査を北里大学医療衛生学部に協力いただき分析したり、くすのき広場を利用する子どもたちにも、アンケート調査を行ったりもしています。地域や子どもを思う気持ちと、冷静にそれらを観察することを忘れないから、私たちの活動の方向性を定めることができ、活動者同士助け合う気持ちをつなげられていると思います。



くすのき広場オープン記念「おそうじ大作戦」 から始まった元気な取り組み

2014年7月5日 くすのき広場がオープン。

始めの活動は「おそうじ!」。団地の清掃を子どもたちでしました。その後も団地清掃は、継続して実施しています。

ボランティアの声・利用者の声



渡辺 浩之さん くすのき広場ボランティア

日常的な居場所としてのくすのき広場も、クリスマスやハロウィンなどイベントの時も、子どもたちは大喜び。その様子がうれしい。吉澤さんの思いを形にする力はスゴイと思います。大変なことも多いのに、それを周囲に見せない人。子どもたちが、ここでたくさん経験や人との出会いがあることも素晴らしいけれど、大人にとっても良い出会いが実現しています。

法政大学 大学生ボランティア

ボランティアとして上九沢団地に来ていると、子どもたちや地域の皆さんとの関係が徐々に濃くなってきてうれしいです。また、集まってくる子どもたちを見ていると、くすのき広場が提供している「居場所」は、私たち大人が思っている以上に子どもたちが必要としているのではないかと感じます。

おにぎり隊の皆さん

初めは、今どきの子どもたちにはついていけないなあと思いました。あいさつできないし、行儀も良いとは言えない。注意したら、女の子でも「うるせー!」とか言う。

おにぎり隊は8名で、女性ばかり。年齢は、ほとんど70代です。

私たちの子育てのころは、怒って育てたものだけど、今の子育ては怒っちゃいけないっていうし、ホントにやりにくい。でも、子どもたちの生活は、深夜まで親がいなかったり、気の毒なことも多い。それは、くすのき広場を手伝うようになって分かったことです。今後は、こども食堂にまで発展させようって声もあり、大変になるかもしれないけれど、おにぎり隊の仲間も助け合って、楽しく活動をしようと思っています。仲間がいるって大事です。

金子 一恵さん 利用する子どものお母さん

団地内に子どもたちが遊べる場があることは本当にうれしいです。うちには軽度の知的障害のある子どもがいて、外に一人でするのは心配だけれどここなら安心です。私も時々、子どもたちと一緒にくすのき広場に来ますが、吉澤さんに子育ての愚痴とか聞いていただいたりもしています。

とてもありがたかったのは、ボランティアの渡辺さんのお宅にある七五三の晴着を貸してくださり、娘に着せてくださったことです。皆さんに温かく見守っていただいています。

きれいな着物が
着られて
嬉しいな



アンケート調査からみえてきた 子どもたちの暮らしに必要な取り組み

くすのき広場では、地域のニーズ調査アンケートと、子どもの利用アンケートを行っています。

地域のニーズ調査は、北里大学医療衛生学部の協力を得て実施しています。

結果からは、

- ・経済的な課題を抱える世帯が多い
- ・保護者の帰宅が遅く、子どもだけで夜を過ごすことが多い
- ・しつけができない
- ・学習する習慣がつけられない

など課題が浮き彫りになりました。

また、子どもの利用アンケートからも、お腹を空かした子どもが多いことや、安心して遊べる場を求めていることも分かってきました。

発足当初、「子どもたちが悪さをしないように」見守り、支える活動をするのが大きな目的でしたが、今は子どもたちに「人生の夢や目標が見つけれられるように」見守り・支える活動にしたいと考えています。

遊びの時間の他、清掃活動や宿題をする習慣がつくように環境を整えたり、しつけに関しても、「靴をそろえて脱ぐ」「あいさつをする」「おにぎりを立って食べない」など、まったくできなかった子どもたちが、少しずつ変わってきていま

活動のプロセス



トランプやUNOは、世代を超えて楽しめるツールの一つ

す。「うるさいなあ」とか「ウザイ」とか言っていた子どもたちが、地域で偶然会っても「〇〇のおじちゃん、おばちゃん」などと声を掛けてくるようになって、信頼関係もできてきた実感があります。

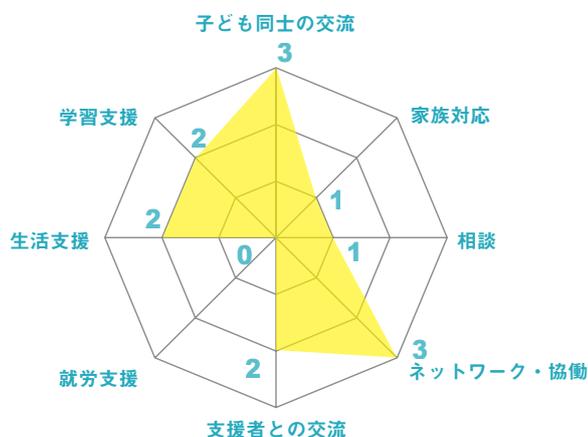
取材を終えて

一見、要塞のようにも見える高層の建物。死角がたくさんあって、中高生がたむろしていたことは容易に想像できました。風にたなびく「くすのき広場」の旗を目印に、建物内に入ると、とてもアットホームな雰囲気。大人が楽しそうに話している。笑い合っている。これなら、入りやすいかもしれないなあと思う。

くすのき広場は発足から今まで、住民だけではなく、行政・福祉専門職・地域の学校や大学など、様々な人の共感・協力で運営されてきました。

吉澤さんの子どもたちへの思いから始まった活動を見事に仲間たちが受け止め、地域に根差す活動になりつつあります。豊かなネットワークがある取り組みは、今後も、多様な知恵と工夫、また、当たり前にならざる子どもたちへの愛情で、より大きく育っていくと確信しました。

活動の自己評価



くすのき広場の特徴は、なんといっても、そのネットワーク。

そもそも建物を担当する管理組合の会長だった吉澤さんが提案者だったことから、地縁役員や専門家がつノウハウを提供してもらい協働する体制づくりをしようとしたことによるものだ。生活支援に関しては、くすのき広場のおにぎり隊以外にも、子ども食堂立ち上げの準備がある。

現状把握

- ・日常的に団地内で迷惑行為を繰り返す子
- ・ひとり親家庭・生活保護世帯の団地内増加
- ・子どもの破損行為による共益費の不足（街灯修理など）

インプット

地域の現状

- ・警察によるパトロール要請
- ・住民の夜警団の結成による対応
- ↓
- ・管理組合の発案による子どもの居場所づくりの提案

アクティビティ

具体的な活動

1. 管理組合が地域の相談援助者へ相談し、具体的に居場所発足のためのメンバー招集
2. 場所、活動頻度、担い手、プログラムの決定
3. 運営費の確保

効果把握

アウトプット

産出物

1. ボランティア、フリーランスライター、大学助教授、民生委員児童委員、市議員等結集
2. 月2回 15時～19時
ボランティアによる遊び相手や学習支援・おにぎりサービス
3. 地域活性化交付金・活動賛同者の寄付・古本寄贈による寄付

アウトカム

活動成果

- ・課題の解決
- ・支援者の結束強化

インパクト

生じた変化

- ・子どものいる家庭の暮らしの適正化
- ・社会保障給付の削減

子ども
食堂

相談

居場所

02

みんなで食べる！ 仲間ができる！元気になる！

ほんそん子ども食堂 いただきます

茅ヶ崎市本村

key person



早川 ひとみさん (53歳)

家族力が脆弱化が問題視される今だからこそ

悩める子や保護者がいるんじゃないか

私自身の育った家庭が、精神的に長い間悩んでいた父、ひきこもりの兄がいて、母もとても苦しんでいました。子ども時代の私は、家の中で何が起ころのか、常にドキドキして安心できませんでした。

だから今日もさまざまな課題があっても解決できずにいる家庭があるのではないかと感じていました。生活クラブの活動で、高齢・障害・児童の福祉に地域密着型に関わる中、地域で孤立する人や家族の存在を知り「誰かと話したい」「誰かに話を聴いてほしい」「自分の思いに共感してほしい」いよいよ、そんな声が聞こえてくるような気がしました。

居場所と食が持つ人をつなげるチカラ

「さいとうさんち」を運営して気づく「食のパワー」

介護保険対象外の一人暮らしの高齢者や日中独居の高齢者が気軽に立ち寄れる居場所が必要んじゃないか。そんな思いで、地域の茶の間のような「居場所」づくりを考えました。2012年8月、通所介護・訪問介護・給食サービスを利用されていた、一人暮らし高齢者の齋藤さんがご自宅を貸して下さるといことで「さいとうさんち」はオープンしました。毎週水曜日10時～15時。参加費300円で昼食

と飲み物が出ます。

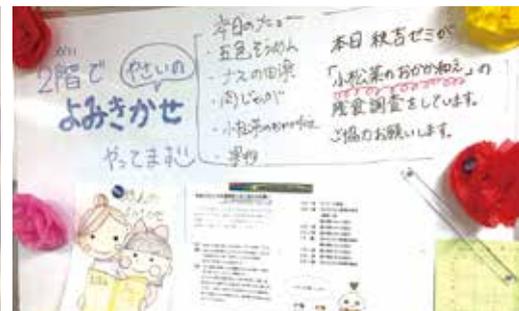
参加者をあえて、どなたでも…としたところ、毎回30組～40組の参加があり、7割は高齢者ですが、子ども連れでの参加も毎回あり、改めて、子育てママの居場所の必要性も発見したのです。

「さいとうさんち」開設で一番の大きな気づきは「食事を大勢で食べることのパワー」。一緒に食べて、会話して、おいしい食事に（カレーだけど…笑）人と話ができることに満足する。その笑顔は力強い。当時、「こども食堂」がメディアに取り上げられていない時期だったけれど、子どもたちのためにもぜひ始めようと決心したのです。

親子で利用できる「子ども食堂」を考えた理由

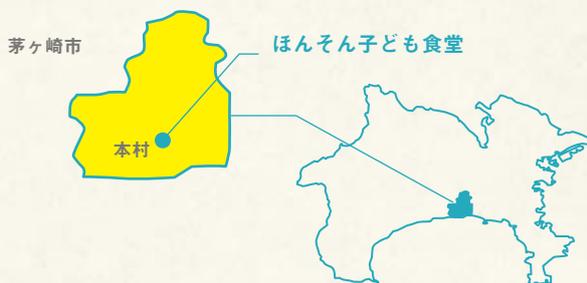
以前勤務していた認可外保育園や現在勤務する保育園で、子育て家庭の課題を目の当たりにします。共働き家庭や、さまざまな福祉ニーズの増加により保育園は必要ですが、一方で保育園が増えると「地域とつながる家庭が減る」のではないかと思います。保育園が地域と連携をとることは大切ですが、親子が直接、地域と関係し、地域に知り合いをつくらなければ、親子ごと孤立してしまうでしょう。

また、子育て上の親の悩みが多様化する中、行政の相談機関・保育園・幼稚園などが対応しているものの、もっと身



その日に紹介されるメニューに利用者もワクワク

地域の概況



(茅ヶ崎市) 人口24万人。平成32年までは人口が微増することが推計されている。高齢化率24.8%、15歳以下の年少人口は13.2%（平成27年時点）。茅ヶ崎市といえば海。奥行100メートル、幅200mに渡って存在するサザンビーチ茅ヶ崎では海水浴やボディボードを楽しむことができる。また、湘南の他の町と比較すると、昔ながらの庶民的なお店が多く、なじみやすい環境で移住者も増えている。

PROFILE

地域の福祉的な取組みのきっかけは生活クラブ。2002年、茅ヶ崎市に転居。2007年には、生活クラブの認可外保育所「だっこ」の職員、2010年に代表。小学校保護者会、子供の会の活動、認可外保育施設の保育の他、生活クラブ生協で食・環境・高齢者デイスサービスなどの福祉サービスを学び、2011年には福祉政策、子育て支援、市民政治の推進等を掲げ、茅ヶ崎市議会議員に立候補し当選。1期4年務める。2016年保育士免許も取得。株式会社が運営する園19名の小規模保育園の園長として、地域とつながりのある保育園づくりを目指して勤務している。



お野菜をご提供下さっている楽庵さんの畑土がふかふか！

近で、さりげなく、友人や家族が支えるように悩みに寄り添い、ある時は、本人さえ気付いていない子育ての課題に気付き、支えることが必要なのでは、と思うようになりました。次に挙げるようなお母さんは珍しくありません。

- ・あやし方がわからず、DVDやスマホのアプリに頼ってしまう
- ・親と生活時間が同じで子どもの睡眠が不足している
- ・外食や総菜に頼っていたので、離乳食が作れない
- ・感染症や熱、下痢は薬で抑えれば大丈夫と思ってしまう
- ・発達障害が疑われる子とどう過ごしてよいのか不安

悩みや課題はさまざま。どの悩みも「こうすればいいのよ」だけでは改善が難しく、少しずつ助言し寄り添って、同じ親として、地域の住民同士、支えていくことが大切なのではないかと思えます。心のこもった手づくりの家庭料理を食べながら、同じ子育てママと、また、先輩ママと、にぎやかに楽しく話をしながら食事して、さりげない支え合いの関係を育む、これがいいと思っています。

ほんそんな子ども食堂「いただきます」の運営

やってみよう！と地域の協力で誕生した「子ども食堂」

担い手と利用者

生活クラブ等、これまでの活動を共にしてきた仲間たちが主な担い手ですが、「いただきます」を始めてから、お手伝いをしたいと申し出てくれた子育てママもいます。支える人、支えられる人の区別はできるだけないほうがいい。仲間の中には、子育て、人生経験豊富なおばちゃんもたくさんいるし、福祉専門職として仕事をしつつ「いただきます」のご飯を作っている人も。「相談員です」って名札をつけてるわけじゃなくて、自然に生まれる信頼関係の中で、相談する関係ができると良いと思っています。

利用者は、乳幼児はお母さんと一緒に。親子組がいつも

8割くらいかと思えます。その他、小学生や中学生も友達同士で利用します。20組～30組。利用する時間は自由なので、時々、集会室が満員になり、食事が終わるのを待っていただくことも。そんな時、プレイルームが助かります。文教大学の学生さんが遊び相手になってくれたり、読み聞かせをしてくれているのも大きな力です。

場所

居場所に場所は必須です。「いただきます」の場合も、場所を探していたところ、日本ホーリネス教団茅ヶ崎教会の^{なかみち}中道牧師が活動に共感され、集会室・厨房・2階プレイルームを貸してくださっています。本当に助かります。

運営費

基本は実費。大人は1人300円。子どもは3歳以上200円。個人の方からの寄付金が合わせて月平均1万円。主にボランティアや教会関係の方からの寄付。その他、八ヶ岳キングダムより毎月4キロのお米をいただいています。野菜は、家庭菜園をされている方と、地域支援活動センターからも継続的な寄付をいただき本当に助かっています。

活動周知

周知の方法は、地域のお茶の間研究所さろんどでのホームページと口コミがほとんど。若いお母さんたちが利用者が多いから、SNSは効果がある。だから、ブログで「いただきます」の献立の写真とか必ず載せて、「いってみようかな」って気持ちになってもらう。チラシを苦勞して作って、こんなこと、あんなことやっていますって宣伝するより、おいしいそんな写真1枚が、人の心を動かす！そう思います。

「いただきます」1回開催するための担い手たちの動き

〈献立〉

開催当日、レシピを準備し、献立をボランティアにLINEを使って共有。ちなみに今回は、メインは「ロコモコ丼」& 野菜中心のアラカルト。「焼きナスのバジルソースかけ」「空心菜と豚肉の炒めもの」「モロヘイヤと鰹節のあえ物」「かば

団体の概要



地域のお茶の間さろんど

所在地	日本ホーリネス教団茅ヶ崎教会内 集会室・厨房・2階のプレイルームを借用
WEB	https://www.facebook.com/Saitousanchi/
代表者	早川 ひとみ
活動内容	「地域のお茶の間さろんど」では、「食と居場所の力」を地域の誰もが利用できる「いただきます」、「さいとうさんち」、赤ちゃんとママのための「プレママと赤ちゃんの日」、「傾聴講座」などを行っている。
開設年月日	2015年11月

活動日	毎月第1、3木曜日 17:00～19:00
利用定員/1日	50組程度 ※予約・登録不要（誰でも参加OK）
職員・ボランティア	20名
利用料金	子ども（3歳）～200円 大人300円
助成金	特になし



地域の方々の野菜の寄付で
毎回サイドメニューもたくさん。
おなかいっぱい!

「ちゃの揚げびたし」の4種をビュッフェ方式で提供します。

〈買い物〉

食材にかかる費用は、毎回50食～60食で、15,000円。本日は、ロコモコ丼のための豚ひき肉3キログラムと牛ひき肉1キログラムが最も大きな出費。肉類はすべて生活クラブで購入するようにしています。野菜のアラカルトは、本日はすべて寄付で賄えました。

〈調理〉

いつも調理ボランティアは14時集合です。レシピを見て早速、調理開始です。皆、熟練の主婦たちぞろい。中にはレストランの経営者や介護施設の食事作り経験者も。6名から8名のボランティアが手際よく調理を進めます。「いただきます」開始時間の17時には、準備万端!

子どもの居場所づくりに集まった人たち



ボランティアの声



大森 小幸さん (55歳)

生活クラブに関わるようになったのは、食の安全に関心があったから。組合員として生産現場に行って生産者の話を直接聞いて生産過程や生産者の思いに触れました。生活クラブは、食に関することばかりでなく、地域のニーズに応えるため、さまざまな福祉事業をワーカーズコレクティブとして行っています。早川さんもですが、生活クラブには、さまざまなスキルや発想のある人がたくさんいて地域に必要な取り組みをどんどん始めています。私にとっては常に仲間たちは、魅力的で、面白いのです。

さいとうさんちの運営を通して、私も「居場所の重要性」を実感しました。そして、就学前後の子どもやその保護者も集えるような居場所をつくりたいと思うようになったのです。私が通う教会の中道牧師が、その思いに共感してくれ、取り組みは大きく前進。「いただきます」が実現しました。毎回の参加者も変動があり、献立を立てるのも、買い物・調理、まだまだ勉強中。でも、やはり、はじける親子と仲間の笑顔に勇気をもらっています。



小松 啓子さん (64歳 介護福祉士)

生活クラブとの関係は20年以上前から。洋服のリサイクルショップ勤務を経て、今は、小規模デイサービス「あのん」に勤務しています。民家をそのまま使った、地域のお茶の間のようなデイサービスで、お泊りや夕食の提供など一人ひとりのお年寄りに必要なサービスをつくりだしてきました。介護保険外サービスを希望する人には1時間500円で対応しています。こういう活動を通して、暮らしの中の小さな困りごとは、人それぞれであることを知りました。同時に、ちょっとした手助けで人は安心し、元気になれることも。「いただきます」も、みんなが一緒にいる中で、ごく自然な手助けをし合えるようになってと思っています。



夫が早期退職しジャズレストランを開業したとき、厨房の手伝いをしていたので、その経験も役立っています。みんなで調理するのは楽しいもの。仲間がいるのはいいことです。

文教大学 健康栄養学部 学生さんたち

ブレイルームで文教大学のメンバーが、食に関する絵本の読み聞かせをしています。管理栄養士として学校や施設等への就職を希望するメンバーは、子どもたちの好き嫌いを少なくできたらと思っています。野菜に関する本を集め、まずは、子どもたちに野菜に親しみを持ってもらうことから始めようとしています。

結果は、まだ出ていないかもしれないけれど、子どもたちとの関わりは楽しく、とても勉強になっています。

利用者の声

30代 育休中(管理栄養士) 子:3歳男子・0歳女子

ここに来ると気分転換になる。夫の帰りが遅いから、いつも食卓は子どもと3人。ここでは子どもたちもよく食べるんです。結婚して茅ヶ崎に。仕事もしていたので、夫の両親くらいしか知り合いが地域にいませんでした。早川さんにも出会えて、いつでも相談できるし、徐々に声を掛けられる友達もできてうれしいです。

30代 専業主婦 子:7歳男子・2歳男子

低価格で栄養があり、とてもありがたい。地元の野菜を使い、調味料も手づくりが多くて安心です。NHKの情報番組で、子ども食堂が紹介されていて、ネットで調べたら「いただきます」を見つけました。今では、私にも子どもにも大事な場所になっています。

30代 自営業 子:3歳男子・1歳男子

子育て中の主婦として、地域のママとのつながりづくりができたらと、サークルを作っています。ここで、おいしいご飯をみんなと食べながら、コミュニティを広げたいと思っています。

野菜のことに興味を持ってもらえるように、
工夫しています！

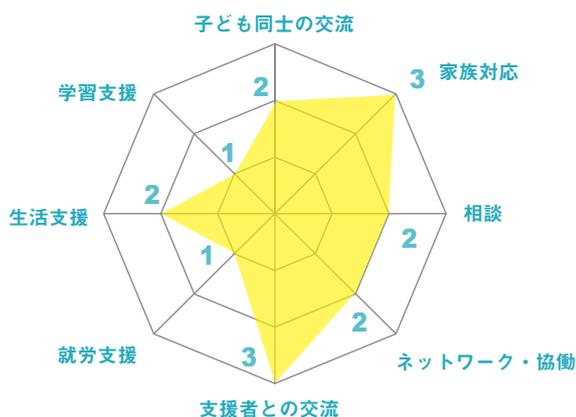


取材を終えて

組織のリーダーとしての活動を求め続けられ、今に至る早川さん。どこでその力が培われたのかと伺うと、短大卒業後勤務した段ボール製造販売会社での経験という。予算管理・営業・製造をいかに会社が成長するようにマネジメントすることの重要性・面白さを無意識に学んだのだと思うとのこと。

また、居場所の話になったとき、フランスのエコール・マテルネルという小学校区に一つある施設の話に。なんでもその施設、図書館機能と体育室の機能と昼寝の場の機能があるのだそう。安心して子どもを生み育て、同時に社会人として仕事と家庭の両立も図れるよう、家族政策・女性政策・教育政策が融合してある施設なのだそうだ。子どもを、また、子どものいる家庭を現代で支えていくために、皆を受け止める居場所のチカラが大きいことを前提にしながら、さらに、さまざまな検討を続ける必要性を感じた。この方も、ただものではありません。

活動の自己評価



「食と居場所の力」を発揮させ、子どもの貧困・不登校・引きこもり・発達障害等々、課題が山積する社会で、親子で夕食を食べる活動として行っている。ボランティアは、生活クラブ関連のメンバーがほとんどだが、介護ヘルパーや介護支援専門員など高齢者福祉関係のスキルのある人、保育士や里親、主任児童委員などの役割で児童福祉に携わる人などさまざま。

ごく自然な居場所の中での支援者との交流を図り、必要に応じて、子どもだけではなく保護者への対応も行っている。また、ネットワークに関しては、近隣の文教大学の学生が定期的にプレイルームでの読み聞かせのボランティアを行っている他、高次脳機能障害の方々が地域で作る「楽庵の野菜」をご寄付いただいている。実施会場は、教会の牧師さんの理解と協力があるこそ。社会福祉協議会の職員ともつながりがある。

活動のプロセス



現状把握

- ・子ども自身の貧困・不登校ひきこもり等の問題
- ・親の子育て不安・地域での孤立子育てについて相談したり頼れる人がいない
- ・子どもの育ちの心配（生活や発達障害等）

インプット

地域の現状

- ・地域の小中学校に不登校児が増えている
- ・茅ヶ崎市に引きこもりや不登校児に対する政策がない
- ・地域の元気な若者に地域での活躍の場

アクティビティ

具体的な活動

- ・居場所づくり
親子で利用できるこども食堂
働く親も利用できるこども食堂（夕食）
- ・食の提供
体に良い家庭料理の提供
- ・子育て支援
- ・場所、活動頻度、担い手、プログラムの決定

効果把握

アウトプット

産出物

- ・日本ホーネス教団茅ヶ崎教会の協力（場所提供）
- ・毎月第1・3木曜
- ・野菜中心のご飯とみそ汁の提供
- ・文教大学学生による遊びの支援
- ・育児相談・仕事と育児の両立など多様な悩みの存在が明らかに
- ・相談対応力整備

アウトカム

活動成果

- ・毎回20組前後の親子が参加
- ・ボランティアが積極的に協力
- ・活動によって見えてきた新たなニーズ、地域課題

インパクト

生じた変化

- ・生活課題のある子育て家庭への支援の継続化
- ・地域の居場所の意義の明確化
- ・地域での支え合いの効果

03

プレイパークの可能性は無限大！
仲間とともに遊びを通して育つ 子ども・若者・大人

プレイパーク 遊 Being♡あしがら

神奈川県 県西地区

key person



山崎 由恵さん (55歳)

息子が自分らしくいることができた「地域」

「ゆるく知っている」大人の包容力

私の3番目の息子（現在22歳）が中学3年生の時、学校が荒れていました。規則違反や授業妨害など荒れる生徒をなんとか抑えようとする先生。子ども同士のトラブルも先生と生徒のトラブルも絶えず、学校の中の信頼関係が崩れていったのです。息子自身、その環境の中で次第に友達や先生との間にさまざまな葛藤が生じて、自然な、自分らしい関係性が保てなくなってきていました。

息子は、小学生の時から地域の「子ども劇場*1」に所属していました。そこに行くと、地域の年齢の違う子どもがいて、自分を幼いころから知っている大人たちがいました。「地域で声を掛けてくれる大人がいる、ゆるく知っている」という関係は、当時、思春期であったこともあり、人に対して不信心を持ちやすく緊張感があった息子に、自分らしさを取り戻し、ほっとする時間を与えてくれたと思います。

大学で学んだ「プレイパーク」に再会 ママ友と活動開始！

同じ時期にPTAの役員になり、役員仲間のお母さんの中に、プレイパークの世話人をしていた人がいました。東京世田谷区にある「羽根木プレイパーク」。私は、大学が福祉分野の専攻でしたので、当時からこのプレイパークは有名で知っていました。彼女は「地域で子どもを育むことが大事」と言っており、とても共感しました。それで、中学校を説得して「校内一日プレイパーク」を開催したのです。

秋の日に、地域の子どもたちを呼んで、学校やその周辺の落ち葉を集めて「落ち葉プール」のコーナーをつくらうと準備しました。この時の中学生たち、とても楽しそうだったのです。笑顔が良かった。それに、落ち葉かきをして、地域の大人に「ありがとう」と声を掛けられる。「これだ!」と思いました。それに、小学生を呼んで行事をしたりすると「良いことした」みたいな空気になることあるのですが、そんなことがなく、とにかく一緒に遊んで楽しかったって思える時

間と場所になっていたのです。

プレイパークって何するところ？

“思いっきりの遊び”で育つ、みんなの主体性と相互性

基本的にプレイパークにはプログラムがなく、当日、子どもが集まって、遊びが始まります。例えば、公園の壁を何歩走って登れるかを競う、「壁走り」。角材をどこまで高く積めるかの「角材積み」、雨上がりの公園では「泥投げ遊び」。当然、皆ドロドロになるので、遊んだ後は「ドラム缶風呂」。時には池の掃除なんかも楽しんでやります。大人が見てバカバカしいと思う遊びも、子どもにとっては最高に楽しい！

池の掃除をするにあたり、池の中の魚を別のところに移すのですが、魚つかみの名人が現れます。こういう遊び方で、子どもたちがつかむのは、まずは主体性。受け身の遊びではなく、自分たちで考えた大勢での遊び。自分が楽しかった時、仲間が喜んだ時、手応えがあります。主体的に考える・やってみるこの楽しさが子どもたちに培われます。もう一つは相互性。プレイパークの遊びは一人ではできない。みんなで遊ぶには異学年の集団だから、いろいろな気遣いも必要です。リスペクトアザーズという言葉がありますが「自分以外の人を尊重しよう。自分も大事だけど相手も大事」という、自己犠牲じゃない生き方を学ぶ場になっていると思います。

自立する大人になってほしいから
生活力を身に付ける

子どもを地域の中で育てるのは、多様な子どもや大人との関りや、遊びを中心とした体験を通して、生きる力を育てるため。生きる力は、生活力。より良い生活は、心も体も満たされるってことだと思います。お腹を満たすことも自分でできるよう「プレバ的こども食堂」もやっ

地域の概況



〈県西圏域および二宮町〉

2市8町（小田原市、南足柄市、中井町、大井町、松田町、山北町、開成町、箱根町、真鶴町、湯河原町）および二宮町。

神奈川県は総人口が913万人。そのうち県西地区は、35万人。人口の増減については、平成24年～28年までの5年間、減少が続いている。高齢化率は29.8%（平成28年）で、県の平均24%より高い状況にある。0歳～14歳までの年少人口については4万人。総人口の11.6%で、県平均12.6%を下回る数値になっている。

PROFILE

4人の息子の母。現在、27歳の長男は知的障害者施設の職員に、25歳次男は渋谷のプレイパークリーダー、22歳三男は放課後児童デイのアルバイト、高校3年生18歳の四男はスクールソーシャルワーカーを目指している。どの子たちも、思春期や受験や就職といった進路に悩む時期があり、皆それぞれに本人たちが自分のチカラで乗り越えていくが、それを助けたのは“地域”や“地域の人々”であったと感じている。「地域で子どもを育てる」と実現する場として、プレイパークの運営にも携わっている。



プレイリーダーには、子どもに遊びを中心とした生活経験から成長を促す伴走者としての役割がある

ています。手に入る食材でメニューを考え、火を起こして、包丁を使って料理をする。屋外で、みんなで作って、みんなで食べる。みんなが幸せな笑顔になります。

若者や親にとっても、プレイパークとの出会いがチカラに！

子どもたちに混ざって「遊ぶ」若者たちがいます。学校では生かしくなかった自分を、プレイパークで発揮しているのです。「子どものころ学校は好きじゃなかったけど、プレイパークは大好き。もう大人だけどプレイパークを応援したい」「どうしても馴染めなかった高校を中退した後、プレイパークに出会い、自分が何がしたいのか、何ができるのか分かった」「有名大学を卒業したけどニートとなり、すっかり孤立してしまっていたと感じていた頃、プレイパークに出会った」等、遊びを核にしたプレイパークでの出会いは、若者たちの心と体を解放するのかもしれない。子どもたちや大人たちとの関わりの中で得る承認は、自分に向き合う勇気と暮らしの中でのチャレンジ精神を呼び起こすのかもしれない。

幼児の保護者は子どもの付き添いで参加していますが、面白いからと小学生が親を連れてくるケースも。親にも「見せたい、見て欲しい」そんな子どもの気持ちが素晴らしいと感じています。プレイパークには「地域を耕す」役割があると思っています。子どもたちが多様な人々の中で育つ地域であるためには、耕さなければ！



近所のやぎ“焼きいもくん”の世話も楽しみの一つ

して、訪れた親同士が、子育てや地域での暮らしを語り合う。そうしてつながりが広がることへの喜びがあるのです。

各プレイパークとの連携

「自分の責任で自由に遊ぶ」「ケガと弁当は自分持ち」

これまで大きな怪我はなかったのですが、一人だけ腕を骨折してしまったことがあります。もちろんプレイリーダーは、応急手当も学んで、技術も身に付けています。開催時には、保険に加入、救急用具等、場に必要な備品をそろえるなどの最低限の準備をして、安全に気を配りながら思いっきり楽しく遊ぶを経験します。

プレイリーダーはプレイパークの要

プレイリーダーは、プレイパークにとって重要なキーパーソン。まず、遊びをよく知り、自らも子どもたちと楽しみつつ、多様なスキルを身に付けている。子どもたちにとって魅力的な存在であると、プレイパークは笑顔と活気で満ち溢れるのです。また、遊びを通して、子どもたちが仲間をつくり、主体性や創造性を育てていくためには、子どもたちを観察し、自信を付け前進する時、戸惑いの時など、子どもに訪れるさまざまな状況に伴走することが求められます。

また、子どもたちが地域とつながりを持って成長を続けるためには、プレイパークと地域をつなげるコーディネーター的な役割もあります。私は、プレイリーダーは、福祉マインドと子どもに遊びを中心とした生活経験から成長を促す支援員としての専門性を併せ持つ専門職だと思っています。

※1 子ども劇場

親子で舞台芸術を鑑賞し、また他の親子とともに色々な活動することなどを通して子どもたちの感性を豊かに育てることを目的とした団体。

※2 保険に加入

一部のプレイパークでは、行政等の共同開催の場合のみ加入

団体の概要



遊 Being♡あしがら

所在地 神奈川県西園域および二宮町
WEB <https://www.facebook.com/groups/228858144149908/>
代表者 山崎 由恵
活動内容 プレイパーク6か所、森のようちえん3か所、他外遊び団体等とネットワークをつくり、連携している。子どもたちの外遊びの力を育て、子どもたちが地域を身近に感じ、多様な世代の人の中で育つ環境をつくる。

活動目的 それぞれの団体の良さを認め、情報交換しながら、お互いの悩みなどを共有し、連携すること。
開設年月日 2015年9月
利用者数 30～200名/1回
資本金 寄付
助成金 なし



1 大井町あそびば



地域の子どもたちが、外に出て、友達をつくり、思いっきり遊ぶきっかけづくりをしたい。まだまだ、活動は始めたばかり。大人たちも楽しみながらやっていきたいと思っている。地域に根差して、長く、継続した活動にしていけることがみんなの目標。



代表者 重田 有紀
設立 2015年4月
開催 毎月第1水曜日 他春夏秋冬随時開催
場所 金子児童公園と篠窪
利用人数 30名/1日
年齢層 0～80歳
参加費 無料
運営費 約9万5千円(補助金)

2 pp@seisho



子どもの育ちや遊びについての理解者を増やし、子どもから大人まで、みんなが自分らしく、のびのび過ごせる居場所をつくっている。プレイリーダーが関わり、その時々、遊びの仕掛けをすることで、子どもたちの遊びに対する創造力はどんどん高まっている。地域にプレイパークの周知をしてスタッフも増やしていきたい。



代表者 黒柳 貴雅
設立 2010年2月
開催 毎月第3土曜日 10:00～
場所 南鴨宮富士見公園等
利用人数 80名/1日
年齢層 0歳～80歳
参加費 無料
運営費 約35万円(年間)
※プレイリーダー派遣料

3 みなみあしがら子どもの遊び場づくり



体を動かすこと・五感を働かせること・自分で遊びを創造すること・いろいろな人に接すること。この大切なことを、子どもたちの遊び場で実現。また、大人たちは、子どもたちに主体性を促しつつ、地域で子どもの成長を見守り、未来を生き抜く子どもを育てている。自慢は自然豊かな「どんぐり山」。雑木林の斜面を利用して、とにかく遊ぶ。



代表者 松井 真理
設立 2014年11月
開催 不定期
場所 どんぐり山
(南足柄市岡本コミュニティセンター裏山)
利用人数 50～60名/1日
年齢層 幼児から高齢者まで
参加費 無料
運営費 約20万円(年間)

4 子ども夢パーク KAISEI



子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶをモットーに、子どもの主体性や創造性を大切にするあそび場づくりを目指している。地域に根付く活動にするためには、もっと参加者を増やしたい。また、子ども夢パークの活動に共感して子どもたちとの活動を一緒にやってくれるサポーターを増やすことが課題。



代表者 小田 猛
設立 2015年1月1日
開催 不定期
場所 開成町中家村公園
金井島緑陰運動広場
利用人数 30～80名/1日
年齢層 幼児～小学生
参加費 無料
運営費 5万円(補助金)

5 外あそび開拓団のや★マン



自然が豊かでのびのびと遊べる近場のフィールドを活用し、キャンプ・川遊びなど、友達と思いっきり楽しむ。安全に遊ぶ術を学びながら、心と体の力を育み、子どもたちが自信を持てるように。自炊やテント建ては災害時のシミュレーションにもなる。バザーやイベントも増え、野山での活動とのバランスなど、定期開催をするか検討中。



代表者 根本 佐和子・オオヤマ アキ
設立 2015年7月
開催 不定期
場所 松田町の野山川など
利用人数 50～60名/1日
年齢層 幼児～中学生・20代～40代
参加費 無料
運営費 特になし

6 にのみや子ども自然塾



子どもたちが、自然の中で五感を使って遊ぶのびのびした遊び場作りを目指し、子どもだけでなく、保護者や多くの人がつながる温かい居場所となることも目指している。土日の冒険遊び場の他に平日に乳幼児親子の遊び場や、小学生向けの遊び場も開催している。活動を継続していくためのスタッフの確保が課題。



代表者 三宅 栄子
設立 2015年7月
開催 不定期
場所 二宮町 東京大学果樹園跡地
利用人数 100人/1日
年齢層 幼児～小学生 保護者
参加費 1人100円



活動のプロセス

取材を終えて

外で入るお風呂は
サイコー！

子どもたちにとって、遊びは生きることそのもの！

遊びは子どもたちのココロを豊かに育み、中でも、外遊びは子どもたちの成長にかけがえのないもの。山崎さんや、遊 Being♡あしがらの皆さんはそう信じて活動しています。

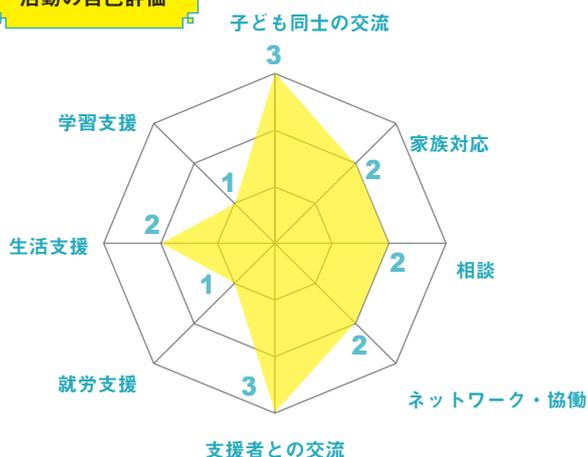
また、現代の子どもたちに失われているサンマ、いえヨンマ。“時間・空間・仲間”、そして“すき間”を取り戻すために、外遊びに勝るものはないとも言います。

「遊びを通して、自然と向き合い、自分を知り、遊びを通して相手を理解し、生きる知恵を学び自律していく。だから、遊び場では、“ケガと弁当は自分持ち”。少しのケガは大きなケガから自分の身を守るには必要なこと。恐れずに、子どもたちの“やってみたい！”を見守りたい。「外遊びには、高価な遊具より、水や土など、自分たちでつくったり、壊したり、変化に富んだ素材が必要。そして何より、そんな子どもたちを見守る温かな大人の眼差しが必要」と山崎さん。

そうだな～と思いました。子どもを地域で適切に見守る大人がつながることで、子どもを地域で育むことができるのです。Respect Others！「遊び」でお互いが大切にされるココロを育もう！「…Being」とは、生きる根源、人という意味です。「遊 Being」素晴らしい活動です。山崎さんありがとうございました。



活動の自己評価



遊 Being の活動では、ミックスした地域の多様な世代の人たちの中で子どもが育つことを目的とし、子ども同士の交流や支援者との交流を大切にしている。

相談に関しては、意識的に行うことはないが、結果的に子どもたちのつぶやきや、親のちょっとした悩みを打ち明けられることが多々あり、プレイリーダーの学習会で相談内容の共有や対応法を勉強している。やんちゃな子どもの子育て等で気苦労が多いように見える親に対してはねぎらいを、興味を持って参加してくれるお父さん達には、「よく来てくれた」と声掛けをするようにしている。地域との関係は子どもだけではなく大人にも大切。

また、生活力を身に付ける場でもありたいという考えのもと、「火おこし」やプレバ的子ども食堂と銘打ってみんなで作って食べ、お腹も心も満たされるような取り組みも遊びの中に取り入れて行っている。

現状把握

- ・外遊びの経験の少ない今どきの子どもたち
- ・地域との関係が希薄な子ども・若者・大人
- ・孤立や生活経験の薄さによる生活力や自立心の育ちにくさ

インプット

地域の現状

- ・自分が子育て（中学生）をする中で学校での子どもの人間関係等の課題があることに気づく
- ・地域での子ども・若者の居場所の必要性を考えると共に、場の実態や在り方を検討

アクティビティ

具体的な活動

- ・小田原で pp@seisho を開設。続いて開成町・大井町・南足柄市とプレイパークが増えていった。最も新しいプレイパークは二宮町の「にのみや子ども自然塾」

効果把握

アウトプット

産出物

- ・団体との連携会議を開催（年に2回程度）
- ①各プレイパーク活動情報共有
- ②遊 Being のサイト立ち上げ
- ・利用者の増加とともに、活動内容をプレイパークや子ども支援に関心を持つ人に紹介

アウトカム

活動成果

- ・各プレイパークの運営上の悩みを共有し解決を図る
- ・プレイパークを新たに立ち上げようとする人たちが現れる
- ・SNS効果か地元以外の人の参加も増える

インパクト

生じた変化

- ・子どもの育ちと地域との関係性をプレイパークの仲間や利用者と考えられる場の広がり
- ・遊びや子どもにとっての地域の居場所の価値や必要性について改め確認そのうえで、活動の広がりを目指す

04

来るだけでOK 究極、生きているだけでOK フリースペース えん 川崎市子ども夢パーク

川崎市高津区

key person



西野 博之さん (57歳)

学校でなくても学び、育つことができる場をつくらう

(特非)フリースペースたまりば(以下、たまりば)は、今、1万㎡の広さを持つ、子どもたちの遊びと活動の拠点である「川崎市子ども夢パーク」の指定管理を受け、その中で、不登校児童・生徒が通う公設民営の「フリースペースえん」の運営を行っています。そのもととなる「フリースペースたまりば」を作ったのは不登校の状態にあったふたりの子どもとの出会いでした。1991年のことです。

一人目は小学校1年の「シュンくん」。入学し、楽しみにしていた学校だったのに、ゴールデンウィーク明けころから体調を崩すようになり、学校に行けなくなってしまいました。彼が涙をいっぱいためて言った「僕もう大人になれない」。その叫びは、まだ6歳のシュンくんにとって、大人へと続く最初の階段を踏み外してしまったと思わせた、この先の社会という光が見えないくらいの絶望のあらわれでした。

もう一人が中学2年生の「マユミ」。命は取り留めましたが、母親による無理心中に巻き込まれました。今から約30年前のこの事件は、マユミのお母さんが舅・姑から「孫が

学校に行けないのは嫁の血が悪い」と追い詰められていたことが背景にありました。

学校に行けなくなると親が子どもを殺そうとしたり、子どもが自分で命を絶とうとしたり、自分のつらさを分かってもらえず家庭内暴力をふるったりします。「甘えだ」「親の子育ての失敗だ」というような社会の中での不登校に対する冷たいまなざしや偏見によって、多くの子どもと親が命まで取られるくらい追い詰められていくのです。

このことから、とにかく子どもたちと共に生きる場をつくり、学校に行けなくても育つことができる、学ぶことができるということを、子どもたちとの実践で示していこうと考えました。

生きていく場・共に生きる場をつくる

子どもたちの反応から気付かされたこと

そこで個人名義でアパートを借りて、学校に行かない子どもたちの居場所を始めたのですが、子どもたちはすぐさま天井裏に立てこもってしまいました。彼らは天井裏掃除をして、2週間後「これが私たちの居場所よ」と私たちにピースをしたのです。学校に行けなくなった子どもたちの多くは、自分に生きている価値が無いと思うくらい追い詰められており、そうした子どもたちにとって、学校などの大人が用意したプログラムは「今のあなたを変えなければ」と映ります。子どものためと思って私たちがつくった居場所に対しても「あなたたちも学校の先生たちと同じ空気感を持っている」と察知して立てこもったのでした。

このことをきっかけに、



「フリースペースえん」一周年を記念して、子どもたちによって描かれた

地域の概況



〈高津区〉面積 17.10km² 人口 211,348 人

1982年の行政区の再編により宮前区が分区分して、現在の高津区となった。鉄道交通の結節点である溝口駅周辺地区を中心に商業・業務・文化などの都市機能が集積している。住宅系土地利用が約35%と最も大きな割合を占めており、全市平均と比べると、工業系や商業系の土地利用の割合が低い。また、農地についても区内に広く点在している。

大規模集合住宅の建設に伴い、子育て中の若い世帯の転入は、市内で2番目に多くなっている。保育所待機児童数は市内最多。慣れない生活環境の中で、さまざまな育児不安を抱えている人が多い状況があり、これらの世帯に対して、育児に関する情報や子育ての交流の場の提供などが必要となっている。

PROFILE

(特非) フリースペースたまりば理事長。日本初の公設民営型の「フリースペースえん」の代表と、管理・運営する「川崎市子ども夢パーク」の所長も務める。早稲田大学非常勤講師。

1991年に川崎市内で不登校の子らが集まるフリースペースを開設。実はその前から不登校の子どもたちに寄り添う取り組みをしてきた。一貫して生きづらさを抱える子どもたちに向き合い続けている。「私たちの居場所づくりは“子どもを信じて待つ”」と語る。精神保健福祉士。

「普通これくらいできなければ」というまなざしを全て捨てて、「来るだけでOK。究極、生きていだけでOK」という、学校外でまずホッとできる場をつくろうと考えました。仲間がいてご飯を一緒に作って食べる、ゲームをする、話をする、多摩川で遊ぶという、やってみたくことに挑戦できる場所を用意してきたのが「たまりば」です。

子どものありようで大人が変容し、それが子どもを劇的に変える

不登校の状態に対し、大人たちは子どもたちを早く学校に戻すことが正解であるかのように思い込み、空回りします。子どもたちに接していると、彼らが求めているのは、まずほっとしたいのだということが次第に分かってくるのですが、大人には「ほっとしたいといっても何もしないでいいのか?」「このまま勉強しないでいたら結局学校に戻れないのでは?」という思い込みがあります。

子どもが本当にそうありたい姿と、大人がそうあってほしい姿にはズレがあって、子どもが生産的にしていないと落ち着かないのは大人の問題なのです。だから子どものだらしなさも、一見怠惰で無駄に見える時間の過ごし方もひっくり返して、「でもこの子は今生きている」と思えるように大人自身を変容していけると、子どもが劇的に変わっていきます。

「大丈夫」というまなざしで見守り、子どもを信じて待つ

たまりばに来た子どもがゲームをしている写真を講演の際などに見せます。学校に行かない子どもたちがゲームをする姿に大半の大人たちは「学校に行かない子にゲームなんてやらせてけしからん」と思うのではないのでしょうか。

でもこの子がゲームをしながら「今頃みんな学校で勉強しているのかな。でも俺、ゲームしかやれてない。俺って生



きている価値があるのかな」と思いながら、かろうじて今の自分をごまかすためにコントローラーを握っているのかもしれない。そこに私たち大人の想像力が及ぶでしょうか。彼に対し、私たち大人の前で堂々とゲームをして過ごせる環境を用意し、肯定的なまなざしを送っていると、子どもは必ず自分の問題に向き合い、自分で動き出す時が来るのです。

それを潰すのは大抵が大人。「大学どころじゃない、仕事もできない。一生だめだ」みたいなことを大人は平気で言います。私たちの居場所づくりは「子どもを信じて待つ」。子どもがダメな自分も受け入れて「こんな俺でも生きていて良いよね、大丈夫だよ」と思える自己肯定感を育むところに、どう大人が関わられるかが問われているのです。

命の物差しを手に入れる

変わらざるを得ない子どもへのまなざし

現場にいると、スタッフには子どもの生きづらさがヒシヒシと伝わってきます。何度もリストカットしている子どももいれば、親に殴られたあとが見える子もいる。傷ついた子どもに直に出会っていくと「おまえ、このままではだめじゃない?」という感覚は、「よく生きてきた、よくここに来られたね」というまなざしに変わらざるを得ません。

これまで出会ってきた不登校や引きこもりを経験した子ども・若者の中に、どこかで死を考えたことがある人は少なくありません。救えなかった命もあります。だから大人には命に対して敏感であることが求められます。頭で考えているだけでは子どもとは通じ合えないし、子どもは近寄ってもきけません。

その子のつらさに寄り添い支える時、大人



団体の概要

NPO法人 たまりば

所在地 川崎市高津区千年 435-10
TEL 044-833-7562
WEB <http://www.tamariba.org>
代表者 西野 博之
活動目的 自己肯定感を取り戻す人間関係を育む環境と文化を創造すること
活動内容 居場所づくり、学び・育ちの支援、相談、情報提供・啓発活動など
開設年月日 1991年4月



活動日 川崎市子ども夢パーク) 日~土 9:00 ~ 21:00 (休) 第3火曜日・年末年始
フリースペースえん) 月~金 10:30 ~ 18:00 (火: 14:00まで) (休)・土・日・祝祭日・年末年始
利用定員 定員なし
登録数 131人(2016年度フリースペースえん登録者実績)
職員・ボランティア スタッフ28名 / ボランティア多数
利用料金 無料
委託金 川崎市委託金(居場所・就労支援事業、学習支援・居場所づくり事業、ふれあい心の友事業)

は自分たちが持っている価値観や物差しが揺さぶられます。「でもこの子は生きていよね、きっと大丈夫だよ」という「命の物差し」を手に入ると子どもが変わっていきます。「私が変わる、子どもが変わる」というのは、親子関係でも支援機関でも同じ。子どもを通じてスタッフが変わる、スタッフが変わることで子どもが変わる。その相乗効果で非常にいい空気が現場に流れていくのです。



近くの公園の大樹の上で演奏

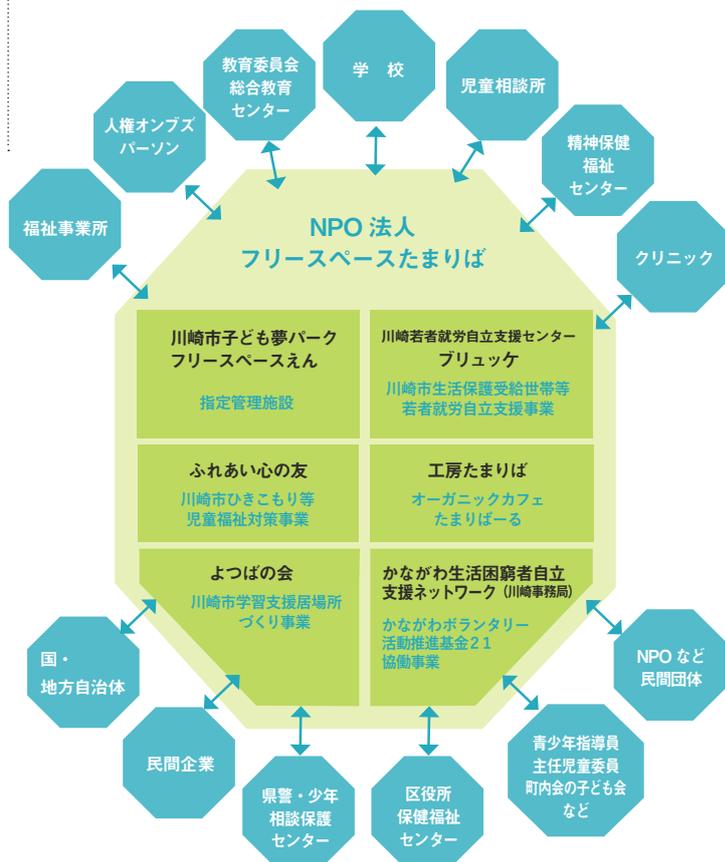
子どもの SOS に気づくことができる大人になる

「子どもの SOS」に気づくには、大人のセンス・力量が問われます。「夢パーク」で、竹にパン生地を巻いて、たき火で焼いて食べるパンを作っていた時のこと。ある子は急いで焼くあまり、表面の焦げた生焼けのパンをバクバク食べ、やっと焼き上げた隣の子のパンまで食べてしまいました。その様子を見ているスタッフが「なんかあいつ、異様なほどお腹すかせているよな」と気付きます。近くに寄ると「頭も体もプーンと臭う。お風呂に入っていないんじゃないか？服も2週間以上変わっていないな」とさらに気付きます。誰でも遊びに来れる「夢パーク」は夜9時まで開いていて、小学生は6時までには帰ることにしているのですが、その子は暗闇の見えないところに潜んで、9時になって探し出されるまでじっと隠れています。「この子は家に帰りたくない事情があるようだ」ということが、アンテナが立っていればすぐに分かるのです。その後の児童相談所との連携の中で、その子はひとり親世帯で、お母さんの調子が悪く、3週間近く一人で放置されていたことが分かりました。

「きみ、大丈夫なの？」と聞いたとき、すぐに「大丈夫」と答える子は、本当は何かを隠しています。ウソをつく背景は何か。自傷行為をしたり他人を傷付けたり、万引きをするなどの問題行動も「あなたに見えますか？私の存在」とい

うシグナルです。それを「この子、すごく面倒くさい形だけど SOS を出しているんだね」というように事象をとらえられるのか、「お前みたいな奴、出入り禁止だ！」と切り捨てるのか。

アンテナが立つというのは、子どもの一見あってほしくない困った現象を通して「あ、これ SOS だな」と思える私になれることだと思います。スタッフだけでなく、ボランティアや研修に訪れる支援者、講演を聴いた方など、子どもの SOS をキャッチできる感度のいい大人をどうつくっていくかも、たまりばの大きなテーマの一つです。



本当に必要な支援とは

たまりばの前身を含めて31年この仕事を続けてきて感じるのは、大人が子どもに対して「本当に大丈夫」というまなざしを送ることができ、大人の「大丈夫」のまなざしに見守られている、愛されている、存在を受け入れられていると思えた子は、間違いなく自分で動き出すということ。だから私たち大人は子どもの邪魔さえしなければ良いのです。飯が食べているか、眠れているか、普段眠るところがあるか。日常のくらしに思いをよせる、気をおくる。これで十分なのです。

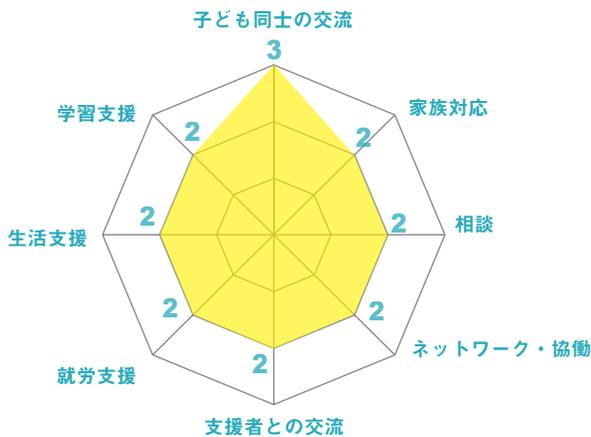
取材を終えて

取材の後に見せていただいた「たまりば」の1年の活動のダイジェスト動画。巨大プリンづくりや泥んこ遊び、海や山で日に焼けた肌、ごちゃっとした中に浮かぶ生き生きとした笑顔。それらはインタビューの中で繰り返し出てきた「子どもを信じて待つ」「目の前の命を大事にする」の積み重ねの先に生まれたものだと思えます。「待つ」ことの力は何にも代えがたいことであることも。



ニーズがどこにあるのか、その問題はどこから来るのか。徹底的に子どもの目線で考えること。それは活動や組織の規模の大小に関わらず、追及していくものなのだと思います。

活動の自己評価



教育、医療、保健・福祉…子どもの生命、安全・安心に関わる機関と横断的なネットワーク持ち、関係者全体で子どもの困難に関われる体制を築いている。また誰でも利用できる地域のプレイパークとして、学校に行っていない子ども・行っている子どもで分断されない交流や、そこでSOSのキャッチができることも特徴的である。

子どもの育ちを支える上での「あったらいいな」を形にし、発信していく。子どもを目の前に育まれる「命を真ん中に」というブレない視点。それを持つスタッフやボランティアの力は何にも代えがたく、大きい。



現状把握

- ・不登校や引きこもりなど、学校や家庭、地域の中に居場所を見いだせない子ども・若者の存在
- ・不登校に対する偏見・無理解
- ・不登校の状態であるか否かに関わらず、自尊感情が低い子どもの増加

インプット

地域の現状

- ・学校や家庭の中に居場所を見いだせない子どもや若者が安心して過ごせる居場所が必要
- ・不登校に対する偏見による保護者の支えも必要
- ・子どものSOSをキャッチする場・大人の必要性

アクティビティ

具体的な活動

1. 誰もが安心して過ごせる居場所の開設と運営
プレイパーク（公設民営）と不登校の子どもたちのフリースペースの管理運営
2. 不登校・引きこもりなどで悩む本人や家族等の相談・援助活動
3. フリースペース利用者による自主企画・活動の支援
4. 保護者、教育関係者、関心のある市民への情報発信、講演会、活動説明会
5. 若者を対象とした就労支援

効果把握

アウトプット

産出物

1. フリースペースたまりばの実践から、市の子ども・若者への支援事業を受託。
 - ・川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん運営
 - ・川崎若者就労自立支援センター「ブリュッケ」運営
 - ・区内生活保護世帯の中学生等を対象とした学習支援「よつばの会」
 - ・市内児童相談所と関わりのある子ども・若者を対象とした支援「ふれあい心の友」
2. 利用者、つながりのある障害者支援施設の製品の展示・販売を通して地域とつながる「工房たまりば」の運営

アウトカム

活動成果

- ・フリースペースに来る子どもたちの自己肯定感の向上。保護者の安心
- ・高校以上からの復学
- ・異年齢、外国籍、障害のある人等様々な人との自然な交流によりソーシャルスキルの向上
- ・プレイパークによるフリースペースの子どもたちと地域の子どもたちの自然な交流
- ・教育、福祉、医療関係等、子どもの命・生活に関わる分野との横断的なつながり

インパクト

生じた変化

- ・学校以外の学び・育ちの場の有効性の立証
- ・子ども・若者の課題、取り巻く問題に関する実践に基づく発信（国・市施策への発信）

居場所

相談

就労
支援

05

カフェ？が学校の中にあるわけ ぴっかりカフェ

横浜市青葉区 県立田奈高等学校内

key person



石井 正宏さん (48歳)

なぜ田奈高校でカフェがスタートすることになったのか？

一緒に高校を変えないかと声が掛かった！

当時の校長と横浜市こども青少年局の局長が出会い、校長が局長に「連携してできる事はありますか」と持ち掛けたみたいです。田奈高校は教職員だけでやることに限界を感じていた。こども青少年局は内閣府のモデル事業パーソナル・サポート・サービス（以下PS）を立ち上げて1年ぐらいいました。「生活に困窮している家庭の子が多く通っているクリエイティブスクールとPSの連携はありだね。では誰にやってもらおう？」という話で僕に声が掛かりました。話をいただいた時「やった！」と思いました。ずっと学校内支援をしたくて起業したけれどハードルは高かった。だから「ああ、これがかつり学校の中で支援ができる！」と、すごうれしかったです。しかも、図書館でやりたいとお願いしたら学校司書の松田さんも「全然いいよ！」って二つ返事で（笑）ありがたかったです。そして2011年に交流相談がスタートしました。

生徒から「安心できる大人」と認めてもらうまで

図書館で相談支援を始めたけれど、知らないおじさんには近づいてくれない。机に「相談員」なんてポールを立ててみたり、いろいろ試行錯誤したけどイメージしていた相談の形にはならない。暇なので松田さんと「レニー・クラヴィッツのセカンドまでは良かったよね」なんて音楽の話をしていたら、そういう姿を見ていた生徒たちが話しかけてくれるようになりました。松田さんに「図書館にいるより司書室に



いたら？」という提案をもらい、司書室にきた軽音部の子にギターを教えて仲良くなりました。お弁当を一緒に食べたりして関係性をつくっていくと、ポロ



ポロっと悩みが出て。昼休みは司書室にいて、それ以外は相談室で相談を受けているのだけど、そこにもリファラー（先生から相談をつないでくれる）があったりして徐々に根付いてきました。

生徒たちの悩み。生活の現実を知れば知るほど

校内にはゆとりのある大人がいるといい

県内ではぴっかりカフェのほかにも、市立川崎高校（定時制）の「ぼちっとカフェ」、市立横浜総合高校の「ようこそカフェ」、パノラマの運営する県立大和東高校の「ボーダーカフェ」などがあり、支援者同士よい関係です。でも、課題をどのようにしていくかはカフェによりさまざまです。

カフェを開いてお菓子とジュースがあれば生徒は当然喜びます。そこまでは簡単なんです。社会にどう広がっていくか、先生にどう理解してもらうかまで考えないと問題は解決しません。そしてカフェだけではどうにもならない部分はどうしてもある。カフェは出会いや信頼関係をつくる場であって、そこで完結はしない。前後や途中で複合的にアプローチしていかないと難しいんです。

「こんな学校来たくない」「転校したい」。時に生徒たちは自分の意に反したことを言いがちです。その言葉の真意に気付かず大人が動き、取り返しがつかなくなり、ある生徒は転校することになってしまった。もっとその子と向き合っていたら「本当はここに残りたい」と本心が言えたはず。大人がどんどん話を進めると子どもの力ではどうすることもできない。僕も掛け合ったけれど「管理職同士が話を進めているのでもう変えられない」という段階でした。

そういう僕も、失敗を繰り返して学んでいます。ある生徒にマッチした就労先の候補を出して「ここなんかどう？」と聞くと、本人も「いいね」というので合意が取れたと思ったの

クリエイティブスクールとは

中学卒業までに、持てる力を十分に発揮しきれていない生徒を2009年度より入学選抜試験を行わない形の入試方法で、積極的に生徒を受け入れる高校。神奈川県には田奈高校のほかに、大楠高校（横須賀市）、釜利谷高校（横浜市）、今年度より大和東高校（大和市）、大井高校（大井町）がある。

生徒の多くに学力の問題があり、その背景に経済的困窮、生徒自身の障害、親の疾患、過去のいじめ問題など、複合的課題を持つ生徒も少なくない。これら生徒の問題を一人ひとり把握するには、学校職員だけでなく、外部組織、地域住民も参画し卒業後の生徒の自立に向けて「教育・福祉・就労」一体の支援が大事と考えられている。

NPO法人 パノラマのネットワーク図



PROFILE

東京都生まれ。(特非) パノラマ代表理事、(株) シェアするココロ代表。音楽活動をしながら40種類以上の職業に就いたあと、(特非) 青少年自立援助センターにて、全国のみきこもり青年の家庭訪問等に10年間従事。2009年独立。対処型支援よりも予防型支援が大事との信念から、若者と社会(雇用)の最初の接点となる高校生の就労支援に注力している。

に、当日面接に行かなかった。嫌でも大人の提案を断るなんて、生徒にとってはとても勇気がいる事。自分を信頼してくれる数少ない大人に対して、わがままを言って離れていってしまったら、と思う気持ちがある。じっくり向き合えば合うほどこの傾向は強くなる。ティーンエイジャーの支援はこういう難しさがある。もっと余裕を持たないと反省しました。



先生に関心を持ってほしい。生徒の本音

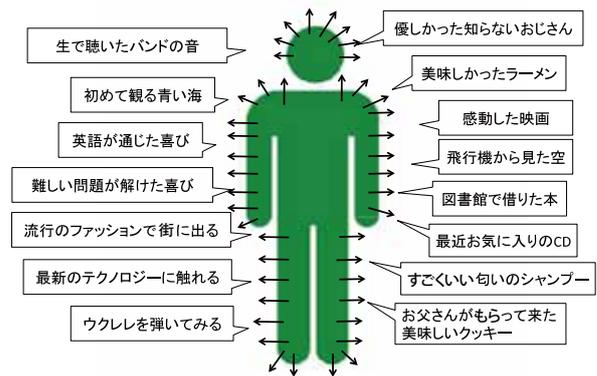
生徒の悩みは家庭の問題が多いです。「生活費を稼ぐためバイトを週5掛け持ちでやっている。疲れて朝起きられない」とか。親に病気や心配な要素があるとその影響で「学校を中退することになった」とか。親も負い目があるからか、子どもが現実味のないことを言っても、さらには「学校辞めたい」「妊娠した」と言っても「自分で責任取れるならいいよ」と容認してしまう。親の歪な寛容さに子どもが飲み込まれていく。経済的な理由で「進学は諦めて」と夏休みに言われ、進路変更を余儀なくされる生徒もいる。親が進学していないとあやふやな情報しかなく、子どもも進路が定まらないまま卒業になってしまいます。本当に親の影響が大きいと思います。相談内容を「先生に話していい?」と聞くと「だめ」と言う生徒はいません。むしろ先生には気付いてほしい。関心

を持ってほしい。というのが本音です。僕たちに相談はするけれど、生徒たちが一番期待感を持っているのは先生です。だから先生と生徒の橋渡しをする、先生のできないところをサポートする、それが僕たちの役割だと思っています。僕たちは週に1回しか関わっていないので知らないこともあるけれど、先生たちは毎日生徒と関わっている。改めて「先生ってすげーな」と行事や卒業式に参加すると圧倒されます。

社会に出る前に文化資本のフックを増やしたい

カフェで皿回しが流行っています(笑)。生徒はすぐ回せるのに大人はできない。回し方やコツを教えてください。教わる立場から教える立場になると、人に喜ばれたり感心される。アーモンドフロランタンを食べ「アーモンドフロランタンってこれなのか」と知る。いつかアーモンドフロランタンの話題になったとき「食べたことある!」と相手とつながった瞬間を感じ、共感できる。会話の糸口になる。自信が持てる。文化資本は目に見えないフックとなり、社会资本に引っ掛かっていく。社会に出ていくとき、フックはたくさんある方がいいです。

文化資本は目に見えないフックとなり、社会资本に引っ掛かる。



(特非) パノラマ作成資料より

学校と地域、教育と雇用—学校と生徒をつなぐために—

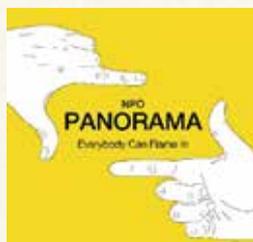
地域の方に学校を知ってもらう「ボランティア養成講座」

学校って閉じた公共空間だと思っているんです。関係者以外立ち入り禁止みたいなね。そこに僕たちが入って道をつくった。去年1年で200人の方がボランティアに来てくださって、その道を歩き、獣道がちゃんとした道になってきていきます。今までは僕の知り合いで、遠方の方がほとんど。でも高校は地域にあるもの。高校に偏見があり、高校名を言ったらバイトを断られたことも。その偏見を変えるのも地

団体の概要

NPO法人 パノラマ

所在地 横浜市青葉区桜台 25-1
桜台ビレジ・ショッピングコリドールR1号室
TEL 045-962-3135
WEB <http://npo-panorama.com>
代表者 石井 正宏
活動目的 若者の社会的自立を目指し、社会的弱者となるリスクの高い子どもや若者たちの社会的自立を目指し、高校内居場所カフェ事業や、有給職業体験バイターンに取り組んでいる。
開設年月日 2015年3月12日



県立田奈高校
びっかりカフェ

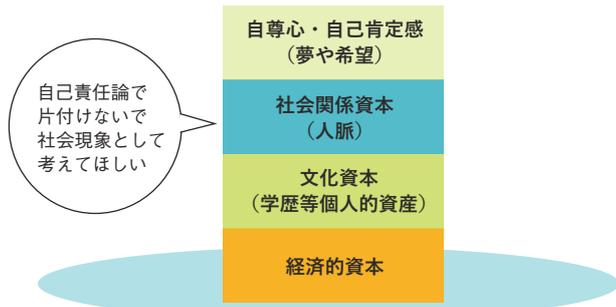
県立大和東高校
Border Cafe

活動日 毎週木曜 お昼～16:00
※学校行事によっては変更あり
利用数 / 1日 平均190人 (2017年度)
職員 2名
ボランティア 平均7名

活動日 毎週金曜 15:30～17:00
※学校行事によっては変更あり
利用数 / 1日 平均140名 (2017年9月現在)
職員 2名
ボランティア 平均4名 (2017年10月現在)

助成金 かながわボランティア活動補助金など

資本が多ければ、進学や就職において有利である。



フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、人間の持つ資本を、文化資本、経済資本、社会関係資本の3つに分類した。彼は社会的地位の再生産の議論において、これらの資本を多く持つ人ほど、進学や就職において有利であり、高い社会的地位につくことができるとした。(Wikipediaより)

域です。地域の方々に入ってもらい、実際に生徒に関わってもらえば「かわいい一人ひとりの生徒」だと分かってもらえる。その方々が地域に戻り、偏見を払拭してくれてブランディングが変わっていく。バイトで雇ってみようかと地元の実業家が思ってくれる。その循環をつくりたくて「ボランティア養成講座」を始めました。

ボランティアのマネジメントは学校でできないので、僕たちが学校と地域のインターフェイス（接点）になります。広報は社協、行政を絡めてやっていきたいです。子育て世代の方にも来てほしいな。他人の子どもに関わって自分の子どもとの関わり方を考えることもできると思う。お子さん連れも歓迎です。

有給職業体験プログラム「バイターン」

在学中に多くの大人たちに支えられながらバイターン（アルバイト）を開始することで、中退や進路未決定を予防するしくみを動かしています。今年から「ボーダーカフェ」を始めた大和東高校は、進路指導室に学年関係なく立ち寄り、第二の保健室のようになっています。そこで対人関係や、アルバイトの相談などが出たりする。

僕の構想なんですが、指導室にバイターンの登録先企業リストがあって、生徒に見せると「こんなところあるんだ、行ってみたい」という流れになる→「じゃあボーダーカフェの時に石井さんに話してみよう」と先生が促してくれる→僕たちがコーディネートして企業に連れて行ってあげる。という流れをつくってほしい。ただし、学校の考える指導方針と僕らの提案が食い違くと生徒も混乱するし、先生方の積み上げてきた指導も水の泡になってしまうので、校内を走る情報に食い込む流れをどう作るかとまだまだ課題があります。「生徒をバイターンにつなぎたい」と先生たちからボトムアップで学校に浸透していったらうれしいです。

行き場のない生徒をつくらないために

僕はひきこもりの支援からさかのぼって高校生まで来ました。テーマは「教育と雇用の接続をどう果たすか」。教育の場にいた子が雇用の場に行きつ



かないことでひきこもりやニートになっている。高校が最後の教育機会になってしまう生徒がいるので、ここに居て、これまで僕が支援してきたこと、感じてきたことなどを出し切りたい。ボーダーカフェもスタートし、今後もこの2校でやっていきたいと思っています。そして、この事例集などを読んで「自分たちも高校でカフェをやりたい」と思う人がいたら、僕たちはノウハウを100%提供しますというスタンスです。

松田 ユリ子さん 学校司書

学校図書館はもともと社会の窓になれる場所。そこにいる多種多様な情報をもつ人も“資料”だと思っていたので「やったね、すごいいいかも!」。話をもらったときの直感です。学校司書としてここは5校目。図書館は愛好家だけが来る場所という雰囲気があり、みんなが使える権利を奪っていると思っていました。で、石井さんは「使える!」と思った(笑)。居てくれるだけでツールになる。結果、何倍もの“人資料”がここにできました。生徒が変わったのではなく、大人が馴染んだ感じです。他の学校でもやってみたいと言われます。管理職、教員が問題意識を持ち、プロジェクトや仕組みを学校全体で考えることが大事だと思います。



小川 杏子さん 法人パノラマ 職員

高校生は人懐こく、カフェに来る大人と仲良くなるのが普通だと思っていました。でも新しく始めたボーダーカフェでは大人と生徒の距離感がありました。ぴっかりも最初はこんな感じだったのか。大人たちがずっと一緒にいたり美味しいものを作ってきてくれるから「安心できる大人」という認識になって距離も近づいたのだとわかりました。2年生で中退することが決まってしまった生徒がいます。その生徒は私がぴっかりに来て間もない頃から、名前を呼んでくれたり一緒にゲームをやったりしていました。最後の日もぴっかりに来て、その日が終わるときに「ずっとここに居たかった」と友達に言っているのが聞こえたんです。この子みたいに学校を離れたたくなくても離れていく生徒がいることを知り、学校を離れてもつながることができるならしたい、と強く思いました。

山登 和子さん ボランティアスタッフ

田奈高校の事務室で働いていました。興味があると松田さんに言ったら「一度、来てみてよ!」と誘っていただいたのがきっかけで退職後参加しました。最初はジュースやお菓子を渡すだけだったのですが、回を重ねるごとに自然と少しずつ距離が縮まってきました。その日の表情や様子を見ながら話し掛けると、生徒からいろんな話をしてくれ



BGMの流れるカフェでボードゲームをして過ごす。ある日のぴっかり

活動のプロセス



ソファなどはほとんど教職員からの寄付やおさがり。明るい日差しが差し込み、居心地の良い空間だ

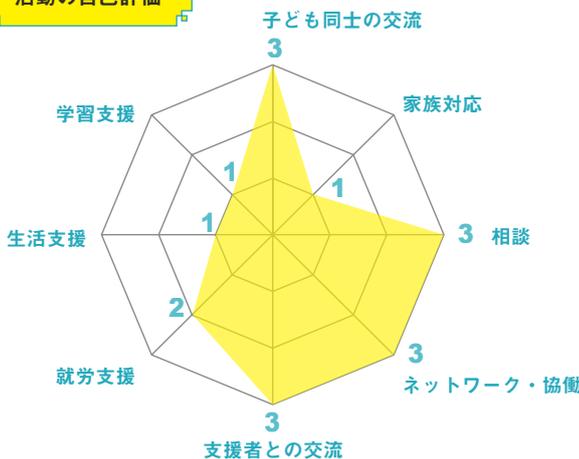
るようになりました。それらを振り返りで伝え皆さんと共有しています。生徒は「ママ〜」（生徒から「カフェのママ」と呼ばれています）と私を見つけると走り寄ってきてくれます。事務室から見ていた時とは全く印象が違います。生徒の現状について、もっと生徒に寄り添うために生徒を取り巻く現状を知りたいと感じています。

取材を終えて

高校の図書館。私は3年間でどのくらい行ったでしょう。一見、元気で明るい普通の高校生が抱えている悩みや生活環境は深刻なことが多く、それは自分たちでどうにかしようと頑張ってもどうすることもできないことがほとんど。「誰かに気付いてほしいとカフェに来ている」と石井さんは言います。そんな気持ちに寄り添い、先生や社会との橋渡しをしてくれる大人の存在はどれほど大きいでしょう。

どの高校にも困りごとを抱えた生徒がいます。「安心できる大人」が先生の他にも校内にいたら、行き場を失う生徒を社会全体で防ぐことができるのではないか。そんなことを感じました。

活動の自己評価



パノラマは、高校生の社会的自立を目指し、進路未決定や中退の予防を目的とした活動を行っている。その中で、校内居場所カフェにおける地域の大人とのネットワークや多世代交流は、社会に巣立っていく生徒たちに多様なロールモデルの提供という点だけではなく、家庭では得られにくい文化的経験をすることで培われる「文化的フック」が、卒業後の社会関係資本へのつながり=自立の可能性を高める取り組みとなっており、課題集中校のオプションとして、モデルとなり得る取り組みである。

これまでに、地域のネットワークを生かし、浴衣パーティー等、さまざまなイベントを開催してきた。また、多様な大人が生徒たちのちょっとした相談にのることで、親でも先生でもない地域の大人の価値観に触れる貴重な場となっている。

一方で、カフェに関わる大人も得るものは多く、生徒たちに自分の子どものことを相談する姿が見られたり、カフェで出会った大人同士がつながり地域での新たな取り組みへとつながっているのも大きな特徴である。

現状把握

- ・支援機関にいて出会うのは20代後半～40代の人たち。そこでは出会えない10代から20代前半の若者の存在に気づく
 - ・ひきこもりから時間が経って出会った場合、その人の抱える課題が複雑に絡み、「解決」にいたることが困難になる
 - ・ひきこもりやニートとなった若者の多くは、学校（職場）と家庭以外の人とのつながりや居場所が無いことが多い
- ⇒対処型支援ではなく、予防型支援の重要性に気付く

インプット

地域の現状

- ・パーソナル・サポート・サービスより派遣された。田奈高校は、それぞれの持つ社会的背景から中退・進路未決定となりやすい生徒が多く通学している現状を目の当たりにする
- ・相談室にこもる相談ではなく、生徒たちと出会う相談の在り方について検討する

アクティビティ

具体的な活動

- ・田奈高校ぴっかり図書館司書松田ユリ子と出会い、図書館内で交流相談を始める
- ・より多くの生徒と出会うために、交流相談・予防支援を目的とした校内居場所カフェを始める

アウトプット

産出物

- ・2つの校内居場所カフェの運営（毎週木曜日、県立田奈高校のぴっかりカフェ、毎週金曜日、県立大和東高校のBorder Cafe）
- ・交流相談からつながり、個別相談を行う「どろっぴん」
- ・地域の大人を巻き込んだ有給就労体験システムの構築（パイターン）

効果把握

アウトカム

活動成果

- ・校内居場所カフェを通じた生徒たちの個別のニーズの把握
- ・地域の様々な大人と関わることにより、生徒たちの職業観や人生のロールモデルが広がる
- ・個別相談（どろっぴん）を通じた個別サポートによる、個別の課題の把握や中退に向けて学校と連携した対応を行う
- ・有給職業体験（パイターン）を通じた進路未決定の防止
- ・卒業後もカフェに相談に来るなど、卒業で途切れない支援の仕組みの構築

インパクト

生じた変化

- ・地域で若者を応援する大人の拡大（（特非）スペースナナなど）・大人同士のネットワークの形成
- ・予防支援・交流支援としてのカフェの有用性への着目と他の地域での拡大（小田原、静岡、など）

06

若者たちのチカラがしっかり生きる社会へ！
今、社会が考えなければならないこと

フェアスタート・フェアスタートサポート

神奈川県横浜市中区

key person



永岡 鉄平さん (36歳)

「かわいそう」ではなく「もったいない」若者たち

大手人材サービス企業でみたもの

大学卒業後約5年間、人材サービス企業に勤務しました。その中で、人材を求めているのに応募者に恵まれない中小企業が多いことを知りました。なぜ大卒新卒者の多くは、大企業の少ない席の奪い合いに注力し、中小企業に目を向けないのか。他方、大学まで出たのに働かない若者たちの存在も新聞等で知り、現代の若者の教育過程や就労の価値観に課題を感じ、今、若者たちに何が起きているのか調べたくなりました。

まず調べた情報は「現代の子どもや子育ての現状」。データを集めると共に聞き取りを進めると「貧困問題」が子どもや子育ての課題として大きくなっていることが分かってきました。特に衝撃を受けた課題が、親世代から子世代に「連鎖する貧困」。子ども時代も成人になってからも、貧困から抜け出せない若者たち。そして、その若者たちの中に社会的養護施設の出身者も多くいることも、新たに知る事実でした。

児童養護施設の子どものための就労と課題

児童養護施設とは「保護者のいない児童や、虐待を受けている児童など、環境上、養護を要する児童を養護し、併せて退所した者に対する相談、その他自立のための援助を行う施設」です。施設ではどのような子たちが生活をしているのか知りたくなり、実際に施設でボランティアを開始しました。

子どもたちと接していて感じたことは、私が福祉分野の素人だったこともあってか、ネガティブな先入観が無く、ごく普通の子どもたちが多いなと思ったことです。むしろアルバイトをしている高校生が多く、偉いなと思いましたし、コミュニケーション能力が高いと感じる子どもたちも多い印象でした。彼・彼女たちが、将来深刻な貧困の状態、社会的に孤立するといった状況に陥るとは感じられませんでした。しかし実際のところ、彼・彼女たちの多くが高校を卒業して就職した後、短い期間で退職し、不安定な収入環境に身を置く事態になっていました。



それぞれの場所で活躍している仲間、その友人たちと参加したフットサル大会

団体の立ち位置・関係機関など



施設や定時制高校の若者たちと企業の間に関わり、双方をつなぐコーディネートを行っています。

行政、各支援機関、メディア等とも連携し、若者たちの精度の高い社会参画に貢献しています。

PROFILE

横浜市生まれ。大学卒業後、リクルートグループを含む2社で通算5年間、企業の採用支援と若者の就職支援双方に従事。その後、「若者と雇用」をテーマに、未解決な社会的課題の解決に挑戦したいと起業を決意。起業準備中に課題を調査する中、社会的養護の子どもたち・若者たちの存在を知る。親からの支援が見込めない中、だからこそ同世代より働くことに真剣に向き合い、高校卒業後18歳という若さで社会に挑戦するが、多くがワーキングプアとなる現実を知り、人材業界で培った経験を生かして、就労支援を開始。

施設出身者の多くに起きていること

高卒→就職（正規）→1～3年以内でやめる。

転職活動が上手くいかない。
（正社員としての転職方法を知らない。
短期間での転職は不信がられる、などの理由）

多くが非正規就労状態となる。身寄りが無い
ため、働かなくては生活していけない。

ワーキングプア状態となる。

なぜ、仕事を辞めてしまうのか？聞き取りや調査をさらに進めると次のようなことが見えてきました。

- ①児童養護施設には企業、就職に詳しい職員が少ないこと
- ②高校にも就職支援において専門性の高い職員が十分に配置されていないこと
- ③インターンシップを含むキャリア教育の機会提供を施設や学校が十分できていないこと

児童養護施設の高校生たちは、卒業後施設を出なければならぬため、「住まい」も就職と同時に探さなければなりません。そのため、住むところを提供してくれる住み込みの仕事（建設業や飲食業が多い）を希望する傾向が強いです。また、一人ぼっちになってしまう不安から、施設の先輩の就職先を頼る（建設関係が多い）こともあります。またやってみたくい仕



刺激と意欲が生まれる就労体験や会社見学

事を考える機会に恵まれないので「なんとなく選ぶ」就職になることも多い。このような就職の仕方は言ってしまうと「ギャンブル」のようなもので、職場の「人と環境」に恵まれないと離職が誘発されてしまいます。離職後、頼れる大人にしっかり相談できればリカバリーも可能ですが、一人で抱え込んでしまうことになると、非正規就労状態に移行する確率が高まり、気が付けば「貧困」状態になっていた、ということになります。

「働きたい」若者がフェアにスタートできる社会に

株式会社フェアスタート設立

社会的養護の若者たちが十分な機会を得られないまま、独特な事情によるギャンブル性の高い就職活動に向き合っている現実には衝撃を受けました。正直なところ、高卒新卒者たちの早期離職の課題は、社会的養護の若者たちに限った話ではなく、一般の高校生全体で見ても同じくあります。

従業員100人未満の中小企業への就職者は厚労省のデータを見る限り、3年以内に約50%から60%は辞めています。しかし、頼れる身寄りが無いという大きすぎるハンデを抱えているのに、精度の高い就職が保証されない現実は、フェアじゃないですね。ただ、解決策はあると思いました。

仕事に対する「やる気」、仕事をしてより良い生活をしたいと願う「自立心」は企業が評価するポテンシャルです。決してお情けではなく、こうしたポテンシャルに期待をし、雇用して育てたいという思いのある中小企業と彼・彼女たちをつなげられれば双方にメリットがあります。幸い、中小企業は人手不足に苦しみ始めていますので、雇用に対する柔軟性が高まってきました。この仲人役を果たすことは、社会的意義があると確信しました。「株式会社フェアスタート」はこうして立ち上がりました。

「キャリア教育」の必要性

また、就職の仲人以外に、課題解決に向けて欠かせないと感じたものが「キャリア教育」です。高校卒業時に多くが就職・自立を目指すのに、

肝心の就職活動の際、社会にどんな仕事があるのか良く分からない、やりたいことも特にない、向き不向きを意識した

団体の概要

株式会社 フェアスタート
NPO 法人 フェアスタートサポート 代表

所在地 横浜市中区北仲通 3-33
関内フューチャーセンター 214
TEL/FAX 045-319-4675 / 045-319-4676
WEB <http://fair-start.co.jp/>
代表者 永岡 鉄平
活動目的 「若者と企業」のコーディネートを通じて、誰もまだ解決できていない「はたらく」における社会的課題の解決に貢献する。
2011年8月22日(株式会社フェアスタート)

フェアスタート

開設年月日 2013年1月4日(NPO法人フェアスタートサポート)
活動日 毎週月曜～金曜(土曜日祝祭日は休み、他夏期・年末休暇あり) 10:00～19:00
年間利用者数 年間延べ126人(2016年8月～2017年7月実績)
職員・ボランティア コーディネーター2名、事務局2名
利用料金 児童養護施設等の福祉施設及び、入所児童、退所者の費用負担は無し
資本金 500万円(株式会社フェアスタート)
助成金 かながわボランティア活動補助金、内閣府、子供の未来応援基金など

職業選択なんて考えたこともない。このような状況で健全な就職活動ができるとは言い難いものがあります。しかしながら、究極的にはこのことは、社会的養護の若者たちだけに限った話ではなく、すべての若者たちに必要な支援だとも思います。学校での教育と社会がもっと身近になれば、若者たちは、もっと学齢期に社会性を養えるようになり、納得感の高い就職活動を実現しやすくなると思います。

就職はゴールではありません。そこからがスタートです。せっかく入社した新入社員が数カ月で辞めるという事態は、企業、社会、本人、全員が得をしません。就職率という指標だけを意識しすぎると大事な中身を見失いかねません。ここにもっと学校教育機関が意識を高めるべきだと思います。

さらに若者就労を支える

「(特非) フェアスタートサポート」を立ち上げ

このような思いを実現すべく、就職後のフォローも織り交ぜた、就労支援の前後のサポートを行う(特非)フェアスター

て、施設の職員さんたちと内容や人選について協議して実践しています。すべてのプログラムにおいて、多様な人と出会い、社会人としての自分の将来像を豊かにイメージできるように、刺激を受けて欲しいと思っています。その成果は子どもたちの表情を見ていると伝わってきます。

フェアスタートで今、必要なものは何か

人でしょうか。一人ひとりに丁寧な支援を行うためにはマンパワーが大切です。フェアスタートの価値観や理念を共有する社員を増やし、もっと多くの施設の若者たちに勇気と希望を届けたいと思っています。事務所に関して言えば、職業適正検査を集団で実施できるような、もう少し広いところに移れたらと思います。そう考えると、お金も必要ですね(笑)。

これからの展望

日本全国に企業とのつながりによる「若者たちが社会と顔の見える関係でつながるインフラ」を整備していきたいですね。これがスタンダードといえる就労に関する文化、価値



高校生向け企業との交流会



企業を開拓!



施設でのセミナーの様子

トサポートを立ち上げました。主に児童養護施設入所中の中学生、高校生を対象に地域の企業に気軽に見学に行ける機会、職業体験ができる機会の提供を主としたキャリア教育支援を実践しています。また、ようやく精度の高い就職を実現した若者たちが、仲間を作り、励まし合いながら社会人として存分に成長していけるよう、社会に出た児童養護施設退所者が気軽に集まって、同世代や先輩たちと交流できる食事会や交流会の企画実施も行っています。毎回、成長の様子を感じられて、とても楽しいです。

魅力的な社会の先輩たちが若者に勇気と力を与える

フェアスタートの取り組みを通して、活動に協力したいと申し出てくださる企業や施設ご出身の社会人の方たちとのつながりも増えてきました。「この人の話を聞かせたい」という方にご協力いただき、「働く」という事、「社会で生活する」という事などを実体験を交えて若者たちに語ってもらっています。

彼・彼女たちが社会に出て関わるコミュニティは施設出身者たちだけで形成されていません。そういう意味で施設と関係がない人たちの話を聴くことも経験として重要と考え

観を日本全国の児童養護施設等に浸透させたい。これまで神奈川と東京の施設の中高生を中心に会社見学やインターンシップなどのキャリア教育をしっかりと提供し、最初の一步目の就職の精度を高めるというのを草の根の活動でやってきました。手応えは出てきていて、企業とのつながりがとても大事で、その若者たちが企業と早いうちから繋がることによって色々な良いことが起きてくるのが分かりました。

そこで施設と企業が直接つながるような動きも作っていくことが必要と感じ、今、関東圏全域まで広がっています。

企業と施設がつながって、その地域単位で施設の子どもの社会性が養われていき、そこで雇用も生まれるという流れを日本全国に広がっていく。これを施設だけでなく、定時制高校や支援対象の若者にも広がってほしいですね。

取材を終えて

事務所を訪ねると、とても柔らかな印象の永岡さんが待っていてくださいました。永岡さんの活動は「子ども若者の居場所」というテーマとは少し離れているかもしれませんが。しかし子どもが社会で自立し生きていくために、先を見据えた

活動のプロセス



働く若者の声をまとめた冊子「YELL」
全国の施設、ホームへ無償提供している

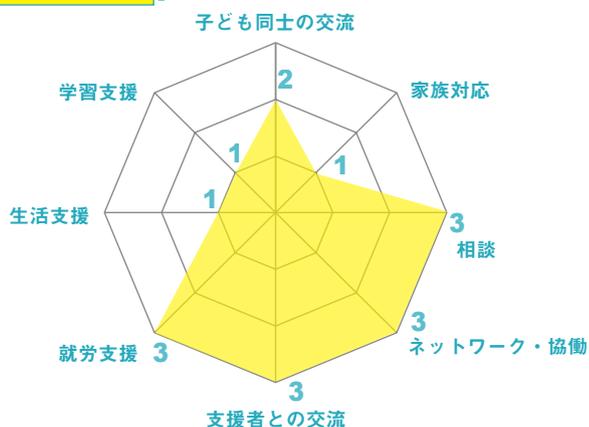
出口支援は、どのような子ども・若者にも必要で、その支援には（特非）フェアスタートサポートの活動にみたように、子どもや支援者が共に集い対話する場が重要な役割を果たすことを知りました。これまでの取り組みについて丁寧に伝えてくださった永岡さんに感謝します。

「昨年4月に就職した新卒者たちがこの1年、誰も辞めなかったんですよ」と嬉しそうに話された永岡さんが心に残っています。設立6年目を迎え一步一步、地域の企業などに永岡さんがつないだ信頼、そして若者一人ひとりと対話を繰り返し就労につなげる取り組みが実を結びつつあります。

沢山の方々に、このような活動があることを知っていただきたいと思います。

就職先の業種など	
・営業職	14名
・ITエンジニア（内1名は障がい者雇用）	13名
・製造業	10名
・建設業	8名
・高齢者福祉職	4名
・理美容業	2名
・調理職	2名
・事務職（障がい者雇用）	2名

活動の自己評価



就労支援に特化している点特徴的。個人個人に合わせた丁寧なオーダーメイド型就労支援を得意とする。また就職後の定着支援にも力を入れており、若者たちとの食事会や交流会などを通じて、若者たちがお互いを高め合う関係性づくりにも取り組んでいる。

現状把握

- ・児童養護施設等を退所し就職した若者たちの多くが数年以内にワーキングプアとなっている
- ・児童養護施設等の福祉施設において就労支援の機能が十分に育っていない

インプット
地域の現状

- ・高卒時の就職支援は高校主導の場合が多い。高校の推薦により就職自体は決まりやすいものの、早期離職に発展する確率が高い
- ・キャリア教育の機会に恵まれていないため、仕事に対する知識や経験が乏しく、就職先の選定時における自己納得感が低い

アクティビティ
具体的な活動

- ・各児童養護施設等との信頼関係の構築
- ・協力企業の新規開拓
- ・就職の斡旋を行うための職業紹介事業免許取得
- ・活動資金の確保

効果把握

アウトプット
産出物

- ・会社見学やインターンシップといったキャリア教育機会の提供が可能となった
- ・理解ある企業への就職の仲人が可能となり、入社後のフォローもしやすくなった
- ・実績を積み重ね、寄付・助成金収入が集まりやすくなった

アウトカム
活動成果

- ・就職の精度が向上、結果的に就職後の早期離職率が低下し、安定した収入環境に身を置ける若者たちが増加
- ・各児童養護施設が就労支援のノウハウを得始めた

インパクト
生じた変化

- ・ワーキングプア状態の若者の減少
- ・貧困の連鎖の未然予防
- ・各自治体の税収の増加
- ・少子化の影響による企業側の人手不足解消にも貢献

07

みんなで食べて、みんなで育つ

はまっこ・てらす

小田原市酒匂

key person



本多 孝子さん (60歳)

PROFILE

厚木市出身。地方公務員を経て、孫育ての予定で早期退職するも、娘夫婦が海外赴任になったため、そのエネルギーを地域活動へ。食生活改善推進団体、健康普及員等に参加。並行して受講していた地域福祉をテーマにした通信講座で子ども食堂に出会い、今に至る。



お味噌汁の具になるもやしのおひげを取るお手伝い。子どもの話は尽きない

合言葉は「一人で食べるならみんなで食べよう」

「はまっこ・てらす」のきっかけは、通信教育で受講していた福祉ボランティア講座で、自宅を開放して少年たちに食事を提供している元・保護司の活動を見て衝撃を受けたことです。孤立しがちな課題を持つ子どもたちを対象とした活動を始めたいと強く思いました。

日頃から開かれた場で子どもと大人が出会い、相談できるハードルを下げておけば子どものSOSをキャッチしやすいのではないかと考え、子ども食堂を始めようと決心。退職を機に参加した食生活改善推進団体、市の健康普及員などの仲間に話すと「やってみよう」と賛同してくれました。その仲間たちとともに「チーム・そよ風」を立ち上げ、子ども食堂開設に至りました。合言葉は「一人で食べるならみんなで食べよう」。地域内で孤食などの問題を抱えている子どもを主な対象に、食事と居場所の提供をしています。

子どもたちが求めていたのは友だちと出会える場だった

時間になると子どもたちは三々五々集まってきます。夕方遅くなるにつれ人数は増え、幼児を連れた母親、孫を連れてくる方もいます。

子どもたちにとってご飯を食べるのはついでで、求めているのは友だちと出会える場所であることにすぐ気が付きました。小田原市には児童館がないので、塾や習い事がない日の子どもたちは、放課後に友達と遊ぶ場所の選択肢が少なく、また、クラスが別になった友達や、学年の違う友達とも一緒に遊ぶ、そんな場所を子どもたちは欲していたのです。また、「友達と夕ご飯を食べることが非日常」ということにも気が付

きました。親も子どもも忙しい今、遊びに行った家でそのままご飯をごちそうになることは少なくなってきているのでしょうか。

お手伝いも非日常になりつつあります。子どもたちに「お米を研ぎたい人」「野菜を切りたい人」と声を掛けると、友だちと連れだって手伝いに名乗りを上げます。何が将来に役立つ体験になるか分からないけど、家ではやらないことを体験する場をつくっていきたいです。

はまっこ・てらすを支える地域の組織

「チーム・そよ風」の中心メンバーは、食生活改善推進団体と市の健康普及員の仲間による10名です。その中には園長経験のある元保育士もいます。子どもからのサインを常に拾い、共有すべきことは共有し、みんなで子どもを見守っています。

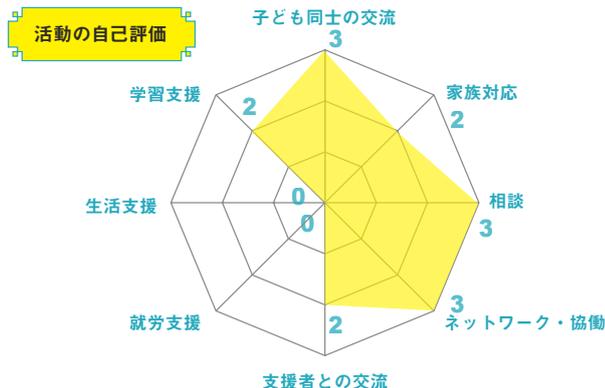
子どもたちが通う地区内の小学校の応援も大きなポイント。校長先生が学校の通信に取り上げてくださったり、はまっこ・てらすをのぞきに来てくださいます。子どもたちの口コミ効果も絶大です。主任児童委員も重要な存在です。子どもの様子が気になったときは、主任児童委員に相談。主任児童委員が、気にかけている家庭の子どもをはまっこ・てらすに連れて来ることもあります。

子どもの育ちを支えながら、地域が交流する場を目指す

はまっこ・てらすには、勉強を教える人、外遊びを見守る人、自宅まで送る人、手芸やお点前の先生など、近隣の大人がボランティアとして参加しています。財源は主に「チーム・そよ風」の会費ですが、地域内の個人や地元ロータリークラブからの寄附、また食材も提供いただいたり、さまざまな立場の方の応援が広がりつつあります。

はまっこ・てらすの場以外で、子どもと大人が出会ったときにあいさつできる関係がつけられるように、近隣の方にボランティアとして参加してもらいたい。それがシニア世代のボランティア活動への参加のきっかけになればなとも思います。

今は子どもが主な対象の取り組みですが、ゆくゆくは子どもからお年寄りまで、年齢や年代の区切りのない誰もが参加でき、お手伝いできる場になりたいと考えています。



所在地：小田原市集会所（小田原市酒匂4-4-21）
 開設：2016年6月15日
 活動日：第2水曜日 15:30～19:00
 利用料：無料
 助成金：市青少年課委託費、酒匂・小幡地区自治会連合助成金
 ボランティアグループ活動助成金
 TEL：090-1438-2461



館合 みち子さん (61歳)

PROFILE

大和市在住。長男・真輔さんが交通事故により重度の重複障害を負い、医療行為が必要な我が子との生活の経験から、1997年に重度障害者を預かる施設「しんちゃんハウス」をスタート。2001年に子どもの居場所としてリニューアル。2011年「第5回かながわ子ども・子育て支援大賞」奨励賞受賞。

「しんちゃんハウス」から「地域家族しんちゃんハウス」に

「しんちゃんハウス」は、小学4年生の時に交通事故に遭い重度重複障害を負った長男・真輔の暮らしやすさを考え建てた家です。亡き後、平成9年に重度障害児を預かる民間の拠点「しんちゃんハウス」としてオープンしました。

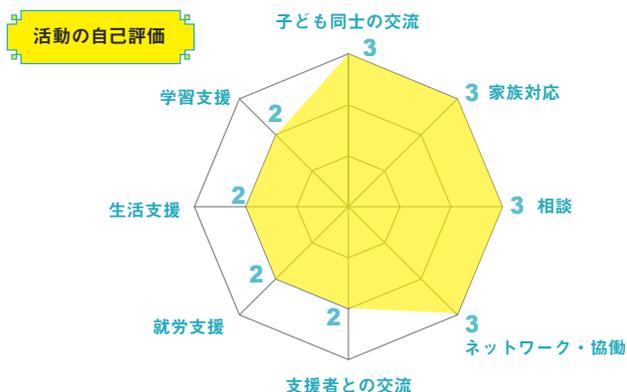
その後、障害者支援施策の改変等で、施設入所等で利用者に行き先ができたことで、しんちゃんハウスの役目も終わると思った頃、学童保育を新しくつくりたいという方と出会いました。「この家を地域のために活用していただけるなら」と、平成13年に子どもの居場所「地域家族しんちゃんハウス」としてリニューアルオープン。「放課後児童クラブ」から始まり、平成17年度に乳幼児の親の交流の場として「子育て広場・Baby's Room」を開設。平成18年度に子育てサポーター養成・活動のコーディネートを行う「みんなの心をはぐくむ子育て支援事業～笑顔ではぐくねっと」を大和市との協働事業としてスタート。平成19年度に子育てに関する相談と親子集いの広場「こども～る」を市から受託し、ショッピングセンター内に開設。今後、子供食堂を始め認知症カフェも予定しています。

一つ始めると次に必要なことが出てくる。そこに行政の委託や補助が得られたりして、取り組みが広がっていきました。

「この子、大丈夫かしら？」には「大丈夫です」と返す

放課後児童クラブの子どもたちは、ただいまと帰ってきて、手洗いうがい、宿題を終えたら、夕方5時のチャイムが鳴るまで、公園に出かけたり、おもちゃで遊んだり、本を読んだり、それぞれ過ごします。

子どもはのびのびと過ごしますが、「うちの子は大丈夫だろうか」と不安を感じている親御さんもいます。今のお母さんたちは子育てに確固たる自信がなく、不安なんだなと思います。また、なにかと我が子を比べるのですが、その必要のないことが伝わりにくい。例えばあるお母さんは「うちの子ブロック遊びばかり。大丈夫かしら」と言うけれど、その子はものすごいイメージネーションを働かせて毎回違うものを作っています。だけど親はつくっては壊すの繰り返しにしか見えておらず、成功させないとダメみたいな言い方をする。「研究者は失敗して成果を生み出すものですよ」と伝えても、な



かなかお母さんの不安は消えません。

ブロックでいろんなものを作り出すその子に「すごいね」と声を掛け、お母さんにも「すごいですよ」と伝える。第三者の視点から「大丈夫」「すごい」と伝えることで、子どもも親もほっとできる。そういうところがとても大事だと感じています。

これからも地域に発信を続ける

乳幼児とその親のスペース「Baby's Room」から「放課後児童クラブ」まで、小学校が長期休みに入ると一日長い時間をしんちゃんハウスで過ごさなければならない。多くの利用者は拠点から徒歩圏内に暮らしていて、中学生になっても道で会う。中学校の評議員を担っているので学校に行くこともあり、関わりは続きます。高校生や大学生になってボランティアとして戻ってくる子もいます。住宅地の中にあって、子どもの元気な声が響いても長く続けていられることに、近所の方に見守られ、理解・協力あってこそ活動だと実感します。

それでも子どもや今の子育てへのまなざしには、まだ厳しいものがあると感じています。ある一定の年齢以上の世代にとって、子育ては自身も経験してきたことで、課題ではないという認識がまだまだあると思います。親子を支えながら、地域の中でも見守るまなざしが広がるよう、今時の子ども・子育ての課題を発信していきたいと思っています。

ザリガニ
見つけた!



所在地：大和市南林間 7-1-15
開設：2001年10月
活動日：月曜日～金曜日 下校時～19:00
利用料：各事業で異なるため、詳細はwebをご覧ください。
TEL/FAX：046-275-7955
WEB：http://www.shinchanhouse.com/

成長に愛を 大学生による寺子屋

MOP HOME

藤沢市高倉



李 紀慧さん(左) 佐藤 彰恵さん(右)

PROFILE

ともに慶應義塾大学看護医療学部3年生。自身が育った境遇から、家庭や家計の環境に関係なく、すべての子どもたちがなりたい自分になれるようにと願い活動する二人が出会った。「あきらめることはない、道はある」と、自分たちの経験をもとに子どもに寄り添う。

やすい。私たちもアタリの大人になりたいと思います。

子どもたちの気持ちに自身の経験で寄り添う

子どもたちが話していくことの中には「大丈夫だろうか」と心配になる内容もあります。拾ったサインはメンバーで共有し、対応を考えます。対応が難しい内容は市役所の職員さんに相談しますが、多くはその子と同じような経験をしたメンバーが、相談に乗るといより、自分の体験を聞いてほしいと話し掛けるようにしています。自分もそうでしたが、思春期の頃は目上の人の話は素直に聞けません。メンバーの経験を生かして子どもに寄り添う。それでうまく対応できたことがあります。メンバーは過去の経験に向き合うこととなりますが、それが子どもたちの未来に生かされるなら嬉しいと感じています。

でっかいのできた



色々な人のご縁と支えを受けながら

「どんな環境にいる子どもも受け入れる場所づくり」を掲げる寺子屋「MOP HOME」は、慶応大学の学生を中心に設立した「学生団体 MOP」が運営しています。

自分が育った境遇から「家庭の状況で将来を諦めるのはおかしい。何かできないか」と考えてきました。子ども

に関わる多様な職種が協働するセミナーに参加した際「子ども食堂か何か始めようと思っている」と話したところ、参加していた藤沢市職員とつながりができ、教育機関への紹介をはじめ、大きな協力を得、今もそれは続いています。

会場の「東勝寺」も重要なご縁。会場を探しに奔走する中、厨房も食器も自由

に使って良いと言ってくださいました。ここは日本語教室の開催など地域に根差した活動で、市行政、地域住民からの信頼が厚いお寺。MOP HOMEに檀家さんから食材の寄附をいただいたり、近隣の方が寄ってくださることもあります。

そして一緒に活動をするのは、育った境遇による困難を経験してきた大学の仲間。強い思いの縁はどこまでも続きます。



子どもたちは居心地の良い場所を見つける天才

子どもにとって「アタリの大人」になる

当初は遊びに夢中だった子どもたちが、次第に勉強をするようになったり、メンバーの手が足りない時、大騒ぎしている小学生の相手を中高生がする姿に、彼らの成長と変化を感じます。

変化は他にもありました。将来の夢を聞いたら「ない」と言った子が、ここでメンバーと一緒に料理を作ることで、料理人になるという夢を持ってくれました。

私たちは子どもたちに「アタリの大人にめぐり合ってほしい」と願っています。良い大人に会えるほど、その人が自分を思ってくれているという認識を子どもが持てるほど、自分が肯定されていると思えて、子どもは夢や自分の思いを語り

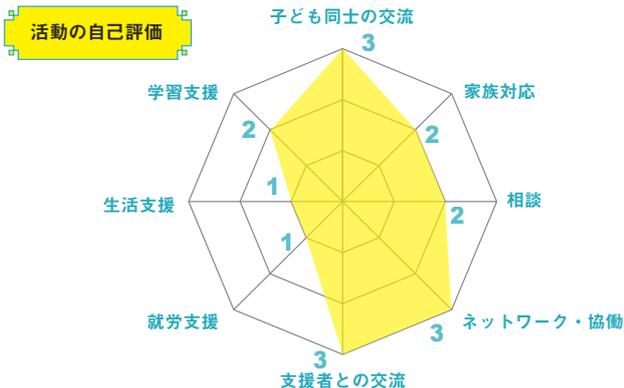
就職・卒業…これからの MOP は

「大学生が運営しているのが MOP のセールスポイントなので、大学を卒業したら MOP も卒業です。メンバーの交代が定期的にある活動を継続する上で、運営に関する子細な引継ぎが気にはなりますが、子どもとの関わりについては全く心配していません。それは MOP に新しいメンバーを受け入れる際、代表の思いを伝えるとともに、新しいメンバーの参加への動機や思いを聴き、共有・共感しているからです。継続するには新しいメンバーの思いも必要です。最初にちゃんと話を聴き、思いを確認しあう。それがブレなければ MOP は大丈夫だと思っています。

メンバーは自分たちが考える「子どもへの愛情の掛けかた」を MOP で全て形にしたいと臨んでいます。子どもたちの未来に携わっているというやりがいと責任を感じながら、子どもの側に立った関わりをしていきます。地域や行政とのつながりも育み、地域の中で子どもの育ちを支えていきます。



MOP HOME スタートの日



所在地：東勝寺（藤沢市高倉 258）
 開設：2016年7月
 活動日：第2・第4土曜日 13:00～20:00
 利用料：無料
 URL：<http://myownplace.wpblog.jp/>

家族にかわって「いってらっしゃい」

さくら茶屋にししば 朝塾

横浜市金沢区

key person



岡本 溢子さん (74歳)

PROFILE

長野県出身 早稲田大学社会科学部卒 受賞歴「神奈川子ども子育て支援奨励賞」他。36年間の小学校教員を退職後、地域のボランティア活動に参加。

教員だったときは、分からなかったこと

教員の頃は学校での生活しか見えなかったもので、もう少し現代の家庭状況や保護者の考え方などを把握しておくべきでした。その分、今勉強させてもらっています。

有志のスタッフが開設から続けてっていますが、皆ボランティアなので、朝塾の運営方針を求められ、困惑する場面もあります。以前、朝塾の鍵開けが少し遅れてしまい、それが原因で辞めていった利用者の方がいました。過ちはもちろん認めるのですが、寛容な精神が世の中に少なくなり、関係性の難しさを感じることもあります。親、子、自分たち、それぞれの目線は違うけれど、子どもたちにとって安心できる場所という基準は忘れずに守っていきたいと思っています。

ちょっぴり「おせっかい」くらいいいんじゃない

子どもたちのエネルギーが、さくら茶屋に出入りする人を元気にしています。一方で、子育て真っ最中の保護者は元気がないように感じられます。原因はスマホかなと思うことも。情報を多く得られますが、間違いや子育てを追い詰める情報に出会うこともあるようです。共通の話題で盛り上がりたりと、悪いことばかりではありませんが、時間を奪われないよう自律していくことも必要と考えています。

人とつながりを持つことは、時に面倒くさいと感じることもありますが、「いらっしゃいよ」と声をかければ立ち寄ってくれる人もいます。自分のことを話せるようになると、他の人の話も聞きたくなり、顔見知りになれば力になってくれます。それを子どもにも子育て中の保護者にも実感してもらいたいと思っています。

行ってきます！



朝塾のこれから

若い担い手も必要。スタッフは高齢になってきているので(笑)。でも、ずっとやれて幸せということでもあります。子どもたちには「どんな日も通い続けてきたこと、継続してきたことはすごい」と伝えてきました。そうやって通った子どもも今や中学2年生。会えばあいさつしてくれるのは感無量です。“家族にかわってつながる大人”がこれからもずっと、必要だと思っています。

所在地：横浜市金沢区西柴 3-17-6
開設：2010年4月
活動日：小学校登校日 7:30-8:00
利用料：5,000円/月
助成金：社協生き生き助成金
TEL：045-516-8560



「丁寧な字で書けてるね」の声掛けに、照れつつも嬉しそう

この街にはこの場所が必要

西柴は高齢化のまち。不便な立地もあり、住民はあまり外出しないので、連れを亡くした方の孤食、孤独が目立ちます。

住宅地は「建築協定エリア」のため建て替えは難しく、若い世帯が購入しにくいこともあり、子ども会も無くなり、この地域に住む子どもの生活は見えにくくなりました。

ボランティア活動を通じてそんな現状を肌で感じたことがきっかけとなり、赤ちゃんからお年寄りまで誰でもいつでも集える居場所「さくら茶屋にししば」を立ち上げました。

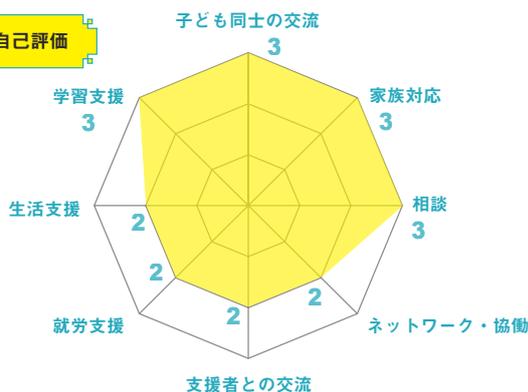
自分の子にはしてやれなかった。でも今ならできる

8年前、ある保護者から「朝、仕事に出るのが子どもより早くて心配。小学校に上がった子どもを朝預かってもらえないか」と相談を受けました。私自身もずっと仕事をしてきたため、同じように感じた経験があり、また、朝の時間に頭を動かすことは、スッキリして午前中の授業から集中できると感じていました。そこで「登校前の朝30分で、頭を動かそう」と、元教員仲間5人を誘い2010年の4月「朝塾」を始めたのです。

始めるにあたり、小学校に説明に行き、了解を得た後、チラシを配布。それを見た親子が来てくれました。

最初の頃は子どもは7、8人。国語や算数のドリルなど、自分のやりたい勉強をして、気が乗らないときは遊んだり本を読んで過ごすことも。学校や友達のことを話してくるときは相談に乗り、保護者にも伝えるようにしています。最近は2名くらい。なにより「いってらっしゃい」「行ってきます」のやり取りをして登校していく姿を見送れるのは安心です。

活動の自己評価



11

がんばっている大人がいることを子どもたちに

さくらノート

川崎市高津区

key person



杉野 瞳さん (37歳)

PROFILE

横須賀市生まれ。高校卒業後に大手企業に就職。社会人学生として経営を学んだ後、教育関係の仕事に転職。社会人10年目に身体に異変をきたし、うつ状態やひきこもりを経験。再起のきっかけは祖母の介護。高卒者、再チャレンジ者に対する就職情報、知識、インターンシップなどが少ないと痛感。さくらノートと出会い、現在に至る。

想が得られるようになってきました。身近な人が働いている記事を読むことで、知らなかった仕事に興味を持ち「働くためにはどんなことが必要なのか」を考えるきっかけになっていることを実感します。これまでに学生と企業のご縁をつないだ実績は、まだ5名くらいですが、インターンシップに行った職場で関係性ができて就職した学生、経営者さんと社員さんを学校に招いた社会人講話をきっかけに興味を持ち、就職に至った学生などが出てきています。

大人になることに魅力を感じない時代を心配して

創業者が株式会社さくらノートを設立した背景には、近年、大人への尊敬や憧れの気持ちが芽生えないニュースが多いこと、地域に根付いていた昔とは違い、「仕事・働くという事」が身近でなくなったこと、そして、教員は日々の授業や生徒指導に追われ、十分なキャリア教育のプログラムの展開が難しく、試行錯誤を続けていたことなど、子ども・若者を取り巻く環境の変化がありました。ならば地域で働く人々、がんばっている大人を知ることができる教科書、体験をつくらう。それがさくらノート創刊や学校でのキャリア教育、地元の職場へのインターンシップコーディネートのはじまりだったそうです。

先輩の働く姿を見つけ「カッコいい！」

中・高校から、キャリア教育の講師依頼を受け、授業をすることもあります。「どんな職業があるか知っている？」と尋ねると、挙がってくるのは「消防士」「アナウンサー」「パイロット」と漫画やドラマになるような職業。分かりやすい、華やか、という職業ばかりでは現実味が薄い。さくらノートでは、地元で働く、等身大の大人たちにスポットライトを当てることにしました。『目的をもって働く大人は生き生きとして、カッコいい』それを伝えたかったんです。創刊した当時、たくさん子どもたちに読んでもらうには学校で配るのが確実だと考えました。サンプルを持って各学校の校長を訪ねると、「こういった冊子がほしかった！」と口々に言ってもらえました。

取材対象者は全員、出身中学、高校を載せています。自分たちの先輩を見つけると「あ！うちの学校の先輩だ」「こういう仕事が地元にあると知って興味が沸いた」と、率直な感

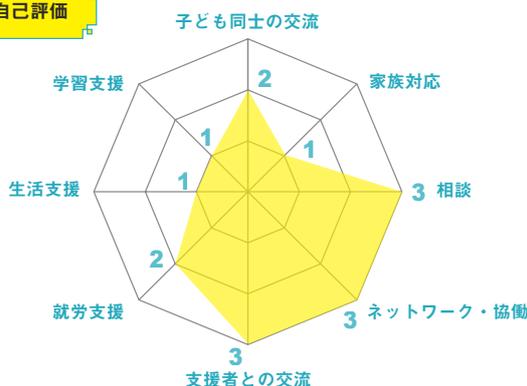
「尊敬できる大人がいる職場」を選択基準に

創業者が石川県に戻るため、神奈川での事業を続けていくにあたり、今までキャリア教育で関わった学生や学校、企業とのつながりをさらに強化して仲介役になりたい。そんな思いから所長を引き継ぎました。さくらノートの制作、キャリア教育の講演事業企画など一手に担うことになり、正直、不安なこともありましたが、健全な職業観を育成しようと一緒に動いてくれる人たちが、地元で働く担い手を増やそうと地域貢献を進んで行ってくれる企業に後押しされています。さくらノートは協賛企業の賛助制度により、無料で横浜、川崎、横須賀、相模原、町田エリアの中学校・高校・大学など約410校、約65,000部配布しています。

私自身、さくらノートの取材や協賛企業との出会いを通じて魅力的な方にたくさん出会えました。この人たちと働きたいと思う職場もたくさんあります。もし高校時代にキャリア教育の授業があり、さくらノートを手にとることが出来たら、名前の知られている企業に就職すれば安泰という考えではなく、どんな人が働いているのか、どうやって仕事を覚えていくのか、困ったら誰に相談すればよいか、と働く自分をイメージしながら就職活動ができただろうと思います。学生や先生から相談の連絡がくるたびに「これからも続けていきたい」と思うのです。

さくらノートの編集・発行の他、地域企業と連携した学校へのキャリア教育サポートを行っている

活動の自己評価



所在地：川崎市高津区坂戸 3-2-1 KSP 西棟 4階 NEO-S4 号室
活動日：月曜～金曜 9:00～18:30 (祝祭日除く)
WEB：<http://www.sakuranote.jp/>
TEL：044-281-0833

編集後記



子どもは社会の宝。次世代のために子どもが心豊かに育つことが必要。皆が思うことではあるものの、現実には、隣近所の子どものことはよく知らないし、気軽に声を掛けるのはばかられると思う人も多いのではないだろうか。

本事例集で、多くの「居場所づくり」に携わる人、「子ども・若者を支え、応援しようとしている人」に出会う中で、これらの人々が、社会の子ども・若者に真に親身に向き合うところから取り組みを始めていることに気付きました。

また、「子どものために」と声高に取り組みを始める前に、より崩壊が深刻な地域の大人の共同体を再構築しようとしていることにも驚きました。確かに、希薄、あるいは壊れた大人の関係のなかで、人間関係の豊かな子どもの関係がつかれるはずありません。

子ども・若者への支援は、大人たちの柔軟で、人や組織が支え合う社会的規範を取り戻そうとする姿勢から始まっていました。そして、そこには大人たちの魅力的な笑顔がありました。可能性や期待をたくさん感じた取材でした。

お知らせとお願い

子ども・若者にとっての居場所がいかに大切なものなのかを広く社会に発信していくこと、そして身近なところで具体的な活動が広がっていくこと目指し、県の取り組みとも連携を図りながら、「子ども・若者の居場所づくり」をテーマに、ガイドや事例集の発行、フォーラムの開催を行っていきます。

今後の予定

2018年1～2月 第2回フォーラム開催
2018年3月 ガイドVol.2発行

このガイドを読まれた感想、子ども・若者の居場所づくりの取り組みについて共有したい課題、活動に取り組んで気が付いたこと、身近なところで活動しているグループ等の紹介など、下記まで情報をお寄せください。

Eメール: ibasyo@knsyk.jp

(お問合せ) 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 企画調整・情報提供担当
TEL 045-311-1423 FAX 045-312-6302 URL <http://www.knsyk.jp>

KANAGAWA CASE BOOK 2017

子ども・若者の居場所づくり事例集

企画・取材・編集	特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター 佐塚 玲子・福田 尚子 社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会 古張 忍
デザイン・DTP	特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター 塚原 祥子
取材協力	くすのき広場、地域のお茶の間さろんどて、遊 Being♡あしがら、(特非) フリースペースたまりば、(特非) パノラマ、(株) フェアスタート・(特非) フェアスタートサポート、チーム・そよかぜ、(特非) 地域家族 しんちゃんハウス、学生団体 MOP、(特非) さくら茶屋にししば、(株) さくらノート
協力	社会福祉法人 神奈川県共同募金会
発行日	2017年11月20日
発行者	社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会



この冊子は、赤い羽根共同募金の配分金により作成されました。

